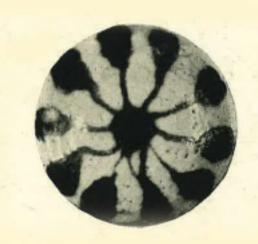
图道

日本陶磁協会誌





東洋古美術



壺 中 居

東京都中央区日本橋通三ノー電話 千代田(27)1836番

益德染付魚藻文壺

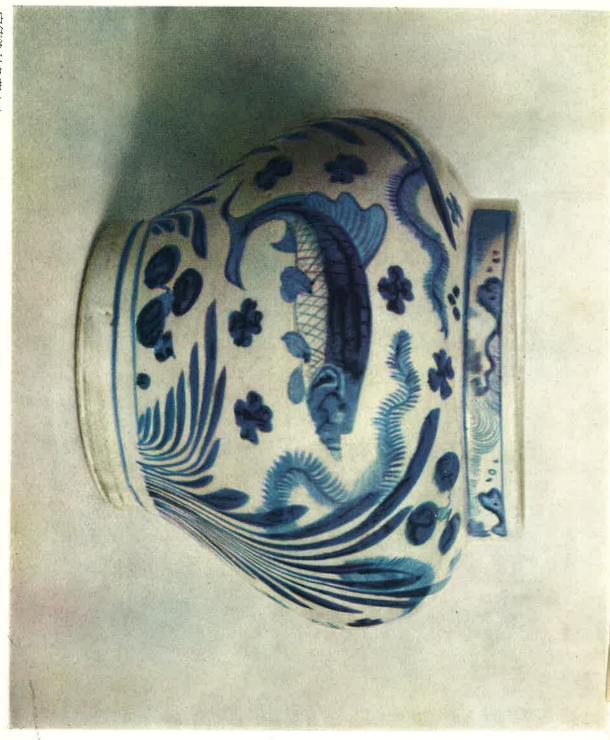
(高六寸五

中国の風土と漢民族の中で育つた傳統的なものを代表している逸品だ。中国の風土と漢民族の中で育つた傳統的なものを代表している逸品だ。まが手がいまた一度でも見た以上は必ず記憶に残つている、それ程、この壺は人をただけで「これ、これ」と会心の笑を浮べる人もあろう。それ程、この壺は人をなから帰りの車中で、あの壺のことを思い出すといつも後髪を引かれる思いがする」と云つていた。ボッテリとした脂肪のような釉は白くはなく、寧ろ汚いと云京から帰りの車中で、あの壺のことを思い出すといつも後髪を引かれる思いがす京から帰りの車中で、あの壺のととを思い出すといつも後髪を引かれる思いがす京から帰りの車中で、あの壺の色を浮べる人もあろう。それ程、この壺は人を恋がら帰りの車でで育つた傳統的なものを代表している逸品だ。

「仁清記年銘物」への一追求 …… (6)、 「志野織部黄瀨戸展」を顧みて …………………………… 小 森 松 庵 …… (10) 平月橋の陶茶 …… 本 多 静 雄 …… (22) 古陶心…………………………山田 喆……(25) 随 筆、茶会記、支部だより、 会員名簿 等 The TOSETSU CONTENTS FOR APRIL, 1953 PLATES Frontispiece (in color): Blue and White Jar. Hsuan-te. 1. Nezumi (Gray)-Shino Te:-Bowl. 2. Shino Tea-Bowl. 3. Ch'eng-Hua Vase in Red and "Pea-Green" Glaze. 4. Ch'eng-Hua "Wu-Tsai (Polychrome Enamelled)" Jar. 5. Ch'eng-Hua Blue and White Jar. 6. Ch'eng-Hua Blue and White Jar. 7. Reign M:rk of Same. 8. Ki (Yellow)-Seto Bowl with Cover. 9. Oribe Handled Ewer. FOREWORD On Issuing the First Number of the "Tosetsu". By Hikotaro Umezawa Chairman, Japan Ceramic Society. LEADING ARTICLES By Takushin Kushi 2 Ch'eng-Hua Period Wares. By Kenzo Yasuda 6 A Research into Dated Works by Ninsei. MISCELLANEA "Haiku"-Poems and Ceramics. By Tou Komura 23 Chanoyu-Party Given in Honor of Mr. Ichizo Kobayashi's Return from a World Tour. By Honan Tayama 24 Ceramic Glossary (1) . Compiled by the Editorial Staff 6

W 12 ...

ETC.



Frontisolece (in color) : Blue and White Jar, Hstian-tê, 1. Nezumi (Gray)-Shino Te .- Bowl, 2. Shino Tea-Bowl, 3. Ch'eng-Hua Vase in Red and "Pon-Green" Glaze. 4. Ch'èng-Hua "Wu-Tsai (Polychrome Enamelled)" Jar. 5. Ch'eng-Hua Blue and White Jar. 6. Ch'eng-Hua Blue and White Jar. 7. Reign M rk of Same. 8. Ki (Yellow)-Seto Bowl with Cover. 9. Oribe Handled Ewer. FOREWORD On lessing the First Number of the "Tosebsu". By Hikotaro Umezawa Chairman, Japan Ceramic Society. LEADING ARTICLES Chiene-Has Period Wares. By Takushin Kushi 2 A Research into Dated Works by Ninsei. By Kenzo Yusuda----- 6 MISCELLANEA "Halku"-Poems and Ceramics. By Ton Komura 23 Chanoyu-Party Civen in Honor of Mr. Ichizo Kobayashi's Certaile Glossary (1) . Compiled by the Editorial Staff...... 5 ETC.



鼠志野檜垣 茶 碗



志野茶碗 檜垣絵

©公益社団法人日本陶磁協会



成化銘染附蓮池文 壺



7 成化銘染附草花 文壺高台裏銘



成化銘染附草花文 ©公益社団法人日本陶磁協会



成化銘豆彩唐草文 梅 瓶



成化銘五彩牡丹文 壺

創 刊

磁協 会理事

H

睛を欠く悩み 国十五カ所に亘る地方支部 ます。殊に本誌のかな が、今日まで専属の機関誌を持たなかつたということはました。その結果会員数も逐年増加して、本協会の存在十五ヵ所に亘る地方支部の設置等、大体所期のブラン、 無望であり、特に地方支部から熱烈な支持が寄せられているという 一条業の推進上にも宣傳上にも不便を忍ばねばならない場合が屢々で 事業の推進上にも宣傳上にも不便を忍ばねばならない場合が屢々で 事業の推進上にも宣傳上にも不便を忍ばればならない場合が屢々で 本誌を創刊する運びとなりまして、かつは全国愛陶家の集中的連絡機関

然しながら、こ ひいものでも一年足られる額の經費を娶する割り

黄瀬戸菊つまみ 蓋 向 附



れわれはそれらしきもの のを近年まで認識することが出来なか して傳承されて来ているのであ

なものを吟味検討することによつて、その動かすべからざる線を輪郭を出すにはそれに続く弘治、正徳のはつきりした官窯の典型 陶磁図鑑」を著するに当つて、

を買い、 認定したにとどまるのであつた。古径氏藏のものは未だ古径氏藏でし、現在小林古徑氏藏の成化豆彩唐草文梅瓶(口絵参照)を真物と持たれた成化銘の唐草文鉢が真正の成化の染付作品であることを鑑て、その時代の官窯陶磁のあるべき線を把握し、故山本発次郞氏のて、その時代の官窯陶磁のあるべき線を把握し、故山本発次郞氏の こその名を挙げ真物たることを主張したに過ぎない。それから十年なく写真を撮る機会に惠まれず、写真を示すことが出来ず、文書定したにとどまるのであつた。古径氏藏のものは未だ古径氏藏で 私は弘治の官窯として最も確実なものと思われる弘治銘の龍文皿 徹底的にその 唯一つ尾崎洵盛氏の持つていられる染付靈芝蘭花小碟 昭和二十五年まで成化の官窯として認定するに 時代の技法、 線を把握し、故山本発次郎氏の描法、磁質を極めることによつ

私はもう成化の官窯の発見は出来ないのではないかと断念しさうに いたとき、二十五年の春、 いうべき蓮池文壺(日絵参照)を不言堂の坂本君が三州の岡崎在で

> ある。驚くべき名品というのは従来の目利きと称する商人の眼界かり去ることを平気でやつている者があるが、大いに警戒する必要がでいたするならば、この名品は埋れて、われわれの目に触れないでであると、何んでも偽物といつて薬がしこの場合、この名品を康熙、雍正の写しと鑑して取り上げなか 2) ら遙か離れて現われるということを知るべきである。 私は私の図録などで研究して実物を見ないで、 にはそれだけの教養と薀蓄とセンスが必要なのはいうまでもない 真物と断言出来る人は稀なのであつた。勿論それを真物と鑑するの 表的なものと信ずるところまで来たけれども、 今ではこれを誰も躊躇する人もなく、本当に日本に於ける成化の代 銘の官窯染附の代表的なものとして折紙をつけたのであつた。そし て坂本君の発見を認めた龍泉堂の諸君の度量にも敬意を表する。て坂本君の異常なセンスに敬意を表する。又これを相当高価に購 康熙の写しでないことを極力主張したのであつた。 成化銘水草模様壺の名称の下に、 この壺を成化と感づ 当時としてはそれを

葬るようなことがあれば、 究に一大光明を与えたというのは、発見した者、買つた者、 この蓮池文壺が何等障害なく陶磁界の第一線に出て成化染附の研 日本の陶磁研究はこの点に於て大事な一步を踏み出すことが出るようなことがあれば、この壺は不遇に葬り去られるばかりでな 三者共に一丸となつて、 何れかが未熟な我見を出して、 この壺は不遇に葬り去られるばかり この壺の価値の宣揚に努力したか 疑問を 懐きら

に決定的な威力を持つ一流商人の自重と、研究者の進んだ大胆なるの典型的な名品として今日に至つたことを寿ぐと同時に、この世界る。それは実例が沢山ある。私はこの壺が何の故障もなく真に成化鑑した以上、それは粗末に扱われて破損し亡失してしまう恐れがあ 判定を望むもので 偽物を真物と鑑することは時が来れば是正されるが、真物を偽物と賣れないものでも百に一つは真物のあることを意識して貰いたい。 真物のあることを意識して貰いたい。 しい鑑識眼を誇ることを控えて貰い、 ある。 又収藏家も一流商人に

ばならなかつたのである にも稀な成化の官窯染附の場合であつたから、特に力を入れなけれ品の多い物の場合ならこれ程強調する必要はないのであるが、世界 しく余談に互つた嫌い はあるが、これが宣德官窯染附などの類

れども成化の官窯のはつきりしたものなど一つとして見ていない。い牡丹唐草文の壺(日絵参照)を得たが、その後二年以上を経るけ年の暮私は或る古い支那古陶磁専門の店で成化官窯赤絵に間違いないのか、世界にも稀な成化の典型的な染附壺が、半年もたたぬうちにのか、世界にも稀な成化の典型的な染附壺が、半年もたたぬうちに 今私の持つている成化銘草花文壺(口絵参照)が出て来た。それは この蓮池文壺の「茶わん」に原色版で表紙に載つたのが機縁で、 実体を実証する貴重な資料として弘治銘の赤絵の魚藻文皿の二つる。然し成化赤絵ではないけれども二十七年の十月最も成化赤絵 れで成化の官窯などというものは愈々ないことを痛感したわ た人が龍泉堂に賣りに来たことによるのである。友を呼ぶという これは私の成化赤絵の牡丹唐草文壺の典型的成化官窯であ の表紙を見てそれに似た形の成化銘の壺があるのを気付

> 実質はないのである。成化赤絵の牡丹文壺はボディ るならば共に成化といえる品物であつて、両者には何等弁別すべき方が弘治と銘が書かれれば共に弘治、弘治の方が成化と銘が書かれ現在吉原一氏藏の弘治銘染附龍文皿とは全く一つのもので、成化の 関係から成化赤絵というのが至当であろう。 壺といつてもよいことを断つておかねばならない。 ら、この形が弘治にまで踏襲されたとするならば、 治は連続する時代であるからって同じ雰囲気を持つて描か つて同じ雰囲気を持つて描かれたものであつたのである。成化、弘た。それは同じ磁質同じ手法によつて造形され、同じ赤の絵具で以 ることを実証するのには最もよい資料となることが出来たのであ つてもよいことを断つておかねばならない。然しボディーのの形が弘治にまで踏襲されたとするならば、弘治赤絵牡丹文ーであるから成化赤絵というものの、銘があるわけでないかないのである。成化赤絵の牡丹文壺はボディーが全くの成化 あるから成化の ある。事実成化銘の染附蓮池文壺と私の旧蔵、

真によるものでなく実物に即するものだけに、その根據は固いといた成果は極めて貧弱なものであつたわけであるが、西洋の図錄や写 ねばならない。 かく十年も極力成化の官窯染附、赤絵の研究に盡力しながら、得

草、虫を口にするところの子母雞(文様)の勸杯 (賭酒の杯) 人過ぐるものなし。或は宣杯(宣德の杯)に較ぶるに妙甚し。次に若 宗源の著「選生八践」の「燕間淸賞」の中に「成窯の上品は五彩の 献が如何なる記述を残したかを吟味してみよう。万暦時代の文献、 るに足る正徳又は弘治の官窯作品、又成化の様相を最も忠実に示す以下成化の官窯赤絵、染附、又は成化の官窯の実質を十分表示す る三彩の水亟を説き、 と思われる万曆、康熙、雍正官窯の成化写しを説き、終に成化の銘あ (文様) 豎口(外へ反る口) 扁肚の 惚杯(把杯即ち馬上杯)に と思うのであるが、先づ成化の陶磁に対して支那の文 成化の陶磁の大体の輪廓らしきものを示すこ

(3)

意」の文は恐らく「皆精妙可入余意」であつたに相違なく、この入は幾分抄略されたものとなつているS「遊生八践」の「皆精妙可人余思われない。兎に角「陶説」の引用した文は「蕸生八践」の原文とげたと称する「陶説」の文も「博物要覧」の文を忠実に挙げたともげたと 成化窯の項と同じく「皆精妙可人」となつて、なんとも意味の解らと人と誤刻されたのは、景徳鎭陶録の成窯の頃でも「文房肆攷」の ぬものとなつている。 物要覧」の影響を受けたのやら、それも解らず、「博物要覧」を挙 要覧」が「選生八践」の影響を受けたものやち、「選生八践」が「博 この前半は「陶説」の成化窯の「博物要覧」の文として挙げたもの はつきりしたことは申されないのであつて、 のオリデンのような気がする。「博物要覧」の原文を知らないので 物蓮子酒盞、五供養(五個一揃の佛器)の浅盞、 (極薄)酒琖五彩齊(齋) ちよ(箸)、小碟(皿)、 此の余が評確然と允たるに似たるや。」とあるが、 青花成窯(成化窯)宜窯(宣德窯)に及 同じ万曆の文献「博物 各製小罐、

ぎない。広い意味の成化窯というものは、もつと別な意味も持つもを意味するものであつて、成化の文雅な小品の傑作を高揚するに過万曆時代の項墨林の「歴代名瓷図譜」の文人趣味の觀点からの鑑賞要するに「選生八牋」の「燕間清賞」の成窯に関する文は、同じ が出来る。この體杯は陶説でも、文房肆攷でも、景德鎭陶録でのであつて、その項墨林の説明を見ると略々その輪郭は察する 「五彩浦菊・野口扁肚・肥杯」は「歴代名・強図譜」に図示す

> らしい特色と窺うことが出来る。 靶はたづな、 (材)を意味し、把と同じ意味で、 轡革を意味し、不適当でない かと

草文鉢でも挙げるより外方法はない。その多くは成化、弘治、正德いうことにバると、「支那明初陶磁図鑑」に挙げた陳守貴造銘の唐 ねばならない。勿論民窯の成化赤絵らしきものは相当見ているけれよう。それにしても二つでも真物を見ることが出来たのは幸といわである。これでは如何に成化赤絵を云々しても甚心もとないといえ 認識の範囲では古径先生のものと私のものの二点より見ていないの特色ある素晴しい成化赤絵というのは殆ど見ることが出来ず、私の付、成化は赤絵と強調せざるを得ないのである。ところがその最もいるといえよう。この原則は今でも狂わないのであつて、宣徳は染に及ばないといつているのであつて、誠に穿つた適切な言を述べて の間のものとより推定出来ないものである。 ども、さてどれが最も著しい成化赤絵の特色を示すものであるかと に及ばないといつているのであつて、の成化窯は、染附の宣徳に及ばない、 の成化窯は、染附の宣徳に及ばない、赤絵の宣徳窯は赤絵の成化窯成窯宣窯に及ばず。五彩宣廟憲廟に如かず。」は、万暦時代既に染附

に西亜細亜輸入の純良な吳須が盡きたということはいえないのであな吳須(コバルト)を用いているものを見ているのであつて、成化もあつて、必ずしもそうとはいいかねるのである。黄地染附の高台もあつて、必ずしもそうとはいいかねるのである。黄地染附の高台は漸次使用し尽されて、成化の時代になると普通の吳須より用いら 亜輸入の純良な吳須(酸化コバルト)を用いるが、その純良な吳須窯に至る時、皆平等の青なり。」は宣德官窯の青花即ち染附は西亜細 今の文に次ぐ「宣窯の青乃ち蘇浡泥青なり、 後俱用ひ尽きて、成

全様のないことであつて、成化の染附の色は宣徳吳須の不足を意味するよりも染附の好尙の時代的変化を物語ると見た方がよいのではなかろうか。それは正徳の官窯染附でも第一流の最高のものは成化しいものを用いているのを見るからであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたのであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたのであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたのであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたのであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたのである。それを第一級の官窯風染附は弘治染附の連続を意味し、華麗な回青は西亜細亜輸入の官窯風染附は弘治染附の連続を意味し、華麗な回青を用いるものは、その持するところの好尙に支配されたことを証明するものといえよう。それとも淡い渋い好みの成化官窯風染附は弘治染附の連続を意味し、華麗な回青を用いるものは、年の持するところの好尙に支配されたと見るべきではなかろうか。 時に成化となつて濃艷

なくそれ以後にそれ以上のものはないのである。又こういう選生八あることは言うまでもない。事実成化赤絵以前にそれ以上のものも 赤絵は優雅瀟洒の極みでもあつて、赤絵として遙か芸術的なもので生々しい気の利かぬ宣德赤絵と比較して、洗練された豆彩風な成化に似たるや。」の文は極めて適切な言でもあつて、 五彩創始時代のに似たるや。」の文は極めて適切な言でもあつて、 五彩創始時代のに似たるや。」の文は極めて適切な言でもあつて、 五彩創始時代のに似たるや。所名画意有り。此の余が評確然と允たるでは、 ことで1つまっこ引うことう)の長さい。著者の意見が果して一般に通ずる妥当性を持つものかどうかを

国の有名な図録に挙げられるものも天啓の写し以上に出ない。重なものが残される筈もなく。皆後世に彷造されたもののみで、ものが如何に高価で尊重されたかが解るであろう。現在そういう 貴重此くの如し。」という文があるが、万曆時代成化の杯 という「神宗尚食(大膳)には御前の成杯一雙、直、錢十万、当時已に「文房肆攷」の成化窯の項に

三分)(日絵参照) 成化豆彩唐草文梅瓶(大明成化年製銘、高一尺一寸五分、径六寸

「支那明初陶磁図鑑」序説第二頁に
うとした時には某氏の藏となり、写真を撮ることも出来ない儘に、私は大体成化に間違いないものと鑑し、その写真を戴せて説明しよ鑑」の構想を練つている時に繭山順吉氏が関西から持つて来られ、 の構想を練つている時に繭山順吉氏が関西から持つて来られ、 の 磁 図

真紅の色を以つて花を着色するものであつた。ボディーは麒麟波濤ものというべく、豆彩風な淡い綠と吳須とを以つて葉を書き分け、した。その成化銘の赤絵は桃の花の暦草文で雅典優麗の極致を示す定的なものが存ぜざる限り、これを成化の豆彩と断ずることを躊躇定的なものが存ぜざる限り、これを成化彩豆の真物と思われるものの決定的なも、成化写しの何物でもないと思われるのであるけれども、でもなく、成化写しの何物でもないと思われるのであるけれども、 ぎの処は目立たぬが、よくさわつて見ると中継ぎのものたることを するものであつた。ボディーは余りに上質の精作である為に、中継 ものを見ることが出来たのであるが、これは康熙写しでも、雍正写し に成化銘の豆彩(五彩の淡い瀟洒なもの)の花瓶の真物と思われる 「著者は此図鑑を編するに当り、 (「支那明初陶磁図鑑」所載) と全く趣を同じくし、明初も成 のに見るボディーの約束を示し、成化間違いなきことを証 これ等の三つの官窯系赤絵の外

代科学の粹をつくしてこの踏破征服を志してからでる世界人の欲求には洵に熾烈なものがある。旣に近 性を残している。昨年の三組も遂に徒手消然として も幾十の歳月が費され何れも失敗の歴史と多大の镓 世界の屋根、前人未踏の靈峰ヒマラヤ征服に対す

日本の一組も交つでいることは新達しているらしい。 この中にわが 達しているらしい。この中にわがも計画され、早きは既に山麓に到 のみにても世界のベテランが五組下山した今年は今日迄のニュース 生日本の誇りであり 喜こびである 殊に色繪美陶の最高峰とも云われ と共にその成功を祈つてやまない かも知れぬが、わが陶界に於ける それ程の世界的バリュウはない

司

清記年銘物』への一追求

意と愛情とにより 新研究と抛擲せざる熱情がそこまで到らしめている いものである。 のである。わが仁清研究も不断の努力とうまざる熱 ころ返來ているらし 顔にたえない。 しかしヒマラヤ登頂もあと一歩のと 告する資料を摑み得ないことは汗 霜を経ているが未だ自身を以て報 る「仁清」の活歴史が未だに判然 一日も早くその神秘の扉を開きた ある。私も仁清と取組んで十幾星 者として痛根にたえないところで としないことは私共期の道に携っ いの年々歳々たゆまざる科学の

私はさきに「仁清名談考」(陶磁協会編集・やきも を発表しておいたが、その後のIFF

> す程の新資料は現われない、殆んど総てその範囲で究でも名款に関する限りあの方程式の圏外へはみ出 分類整理出來るようである。

初代仁清初出は隔冥記の慶安二年八月廿四 日らし様には出現してくれないのである。 呼発表文献上の 号あれば行年なく、行年あれば記年なしでそう思う を追求しているのであるが、 ない 新資料は出現しそうにもない。而して現存御記での は焼失又は滅失して仁清に関する限り既発表以外の は示されていないからこの意味では何の用をもなさ 初出は慶安三年十月十九日ではあるがこの時も行年 八月十三日 いる。問題の「仁和寺御記」は慶安以前及元祿以後 く、最終年文献は半泥子氏説によれば元祿十二年卯 それで其後は「仁清作品」の『記年、 (乾山自筆陶工必要) らしく考えられて レが仲 々の難物で年

賣から「明歴元年八十六才」記入の茶入のあるとと入の茶入も実見したが同断である。大阪一流の老商 ないし夢想録であるから問題となり得ない。 記錄出來ない。半泥子氏は夢に托して「天和元年八 だ私の実見実測に提供してくれないから資料として らでは同じく用をなさない、又「寛文四年甲辰」記 妻の彫銘ある点では珍資料ではあつたが年齢の点か 文四年辰十二月吉日」の色繪神酒徳利一双も仁清及 十歳」作品があるらしく書いているが実物は示され も知らされているが旣に数年以上も過つているが未 「明歴三年卯月日」も同様である。私の発表した「寛 発掘破片の「明歴二年」も、 かし大体この正保五年戊子三月二十五日へ改元 藤田家旧 蔵の 水指

陶 碰 語 彙

本陶磁協会編

あげぞこ(挙げ底)桶底の様に底が入り込んであ

周知の如くで、瓜の意匠はこの時代に好まれたとみ 瓜形のものが宋窯の定窯、汝窯、影青等にあるのは たものが出てくる。 えて、文様にも多く見受け、また宋画にも瓜を描い あこだ(阿古陀)阿古陀は南瓜の古名で、変趾香 水指等に阿古陀形のものがある。因みに

顔の花形に端反りになつたもの。 あさがおなり(朝顔形り)茶碗の形の一種で、 朝

時に盃の上部が手を圧するのでこの名がある。 あつしゆはい(圧手盃)端反りの盃で、手にした

(6:)

にも素地は古いが繪付は後世のものがある。李朝白繪を施して値、高くする類である。また金襴・向附 付を加えたものをいう。例えば天啓染付の余白に赤 古陶磁に後世になつて値を高くするために新たに繪 たものに更に錦窯で繪付したもの即ち上繪付を指す 磁に後繪付して古九谷に化けたものもある。 が、今日普通には贍成当時に上繪付したものでなく あとえ(後絵)後繒付の略で、 本來は本窯で焼い

るが、こんなのは論外である。 笠状になつたもの。後世わざと編笠状にしたのもあ あみがさ(編笠) 茶碗で窯の中で自然に歪んで編

文様のもの。伊万里でも真似ている。 あみのて(網の手)古染付や古赤繪によくある網

あんか(暗花)細い線彫り文様。

あるま 資 寛文又は延宝年間位の(森田久右衛門日記)約三十 慶安)の宗和茶会記以後、慶安、 料の出るマー 間位は、仁清の最活躍期らしく、今後も何かと新 いと私は信じて クポイント 即ち赤線区域と見て大過 承応、明歴を経て

日私は定刻早自に再びその家の客となつた。 くるく想いでその主人からの通信を待つた。 が出まつせ」と小声で耳に入れてくれた。私は胸ふ 昨年は大阪のある夏祭釜に招待さ その老亭主は私を別室へ呼んで「いより れて行つたとこ 約束の

『承応。七十

覆入りの小壺が出た、それは所謂「振り出し」であ る。あの茶籠に仕込ん金平糠谷れである。 かしく私は包を閉いた。桐の古箱の中から小さな仕 小箱を包んでいる古代更紗の包をほどくのももど

寸五厘、小壺形で肩部に笹耳が左右に形よくひねり 寸五分五厘、口巾外侧八分五厘、高台徑一

> つているらしい純白のサラノ 貫入が現われている。土は御室土に少々の信樂を打

まつた程であつた。そこには実に鮮明に も息子さんも番頭さんのいることさえ忘れはてい ける!」と直信したものであるが更にお約束辿りソ れるであろう。私も未だ手に取らぬうちに つけられて暫くは他家の座敷であることも、 リと裏返して見ると、 心ある人ならばもうこれで仁清眞品と解して 瞬私の目はその底裏に吸 「是は頂

い拓本が採れたのである。 の拓本諸道具は持たなかつたが鐘墨一個で充分によ があつた。右糸切は細くこまかく実に鮮かで、 私は厚く謝意を表して一直線に家に歸り直ちに文 -九才造。繭印仁清』のヘラ書と押印銘 本式

録を轉写してみよう 献諸資料と対比検討をした。 兹に率直にその日の記

仁清作耳付振出し御室釉瀬戸釉ウス青白なだれ



振出し小印

天 正 正 二 上 年 り 台 廣 巾 一寸○分五厘 一寸五分五厘 一寸五分五厘 八五分厘

七十九才

、ロクロ及成形技術は初代仁清作と確認する。 瀬戸金気釉は純粋瀬戸風に非ず、即ち田舎つぼ 即ち京風化された所謂仁清瀬戸金気釉で獨特の くなく更に洗練され精撰されている。

変して薄水色となり、そこに例の卯之斑が出、連鏡二重釉として白崩れがかけられ、それがある部分窯胴巾の置さ一寸九分弱。大体瀨戸金気釉がかゝり、

付けられてい

る。その肩部から口縁までが四分五厘

に胴が丸く膨れ、 目が立つて あめちまき(飴粽) いる 日と底は細く締つて、 南蛮掛花人の一種で、 全体にロク 紡錘状

に嵌めこんで焼いたものがある。 茶碗などによく見る。 ぜて表面に現われて一 いしはぜ(石はぜ) これも後世にわざと石を素地 種の景色となつたもの。 素地の中の砂や 小石が焼け

器質のものをい いしやき(石焼)土物乃至土焼に対する語で、磁

見受け、仁清の茶壺にも板にし底のものがある。 はザラザラしている。壺の類にもこの手法のものを 俗に大名物底ともいう)一に箆起しとも云い、底面 土の一部は下方にはみ出して擧げ底風になりこれを す時館で底線を撫でて余り土を切り離すので(余り を敷いてその上に陶土を置き成形するが、台から起 みる手法で、底面に特色がある。ロクロの台上に灰 いたおこし(板起し)大名物の唐物茶入等によく

いつかんじん(一閑人) 藍鲨の一種。

無いのを無閑人という。また祥瑞鉢の緣に人强の付がある。両辺に人形のいるのを二閑人と云い、人形恰かも閑人が井戸を覗いているのに似るのでこの名 井戸形の一辺に人形が一つ付いたもので、 た一開人鉢がある。 その状が

宗湛日記にも「シキ」の語が見えている(つぐぐ) つた。因みに高台を意味してまた糸敷の語もあり、 で、後には糸切がなくても一般に高台を指す様にな これを糸切りという。糸底の語もこれから出たもの 使つて切り離すと、器底にその痕が渦状に残るがい いときり(糸切り)器をロクロから離す時に糸を

はない、調う所の「姫さび」とはこのことなの難魔さと渋さをもつている。この言葉は矛盾で

葉性貫入が現われる。之を俗称運銭貫入という 室白である。ウス青窯変は仁清作品の殆んどに 白崩れ釉は瀬戸美濃系の長石ものではない。御 **鬼毫窯変となる。そして白の中には不思議に多** レが出ると必ず必要條件の一項目卯之斑即ち この中に自が出、自の中に

小なりと雖も本格仁清茶入と同手共也。 でない方。柔か手でコット 土も問題なし。御室と信樂の混用にして純白手 とする方の風色でネバツコイ土 と音する方である

t 殆んど正三分印である。 彫銘」に属し、書風書体は山口コレクションの 「三景富士山香炉」の彫名と同風である。筆勢 「承応」と「七十九才造」の影字は「第五項、

繭印は私の方程式の「第四項、輪廓付」に属し

上手でないが気品がある。僅か一寸余の高台内は走つていないがドッシリとおちついている。 へ七字の本字と二字印を押すのである。走つて 僅か一寸余の高台内

記年銘物の確実なものは明歴二年同三年ルび寛文四 四年が仁清の出生年に当るわけである。すると現存 らその最終年の三年と仮定して逆算してみると天正 と認めて元年と見ても三年と見ても僅かの差異だか にこの「振り出し... 作陶時代を一応正直に(承応)、初の年号で僅々三年にして明歴と改元されている扨、承應年号は後光明帝時代で家綱四代羚軍襲職

> 年ものであるからこれらは八十一才、八十二才、 十九才時の作品ということになる 八

室燵説に対し仁清作品と看なしてもよいことになる √合理性は失われていない。又古文献初出の慶安のことではあるが不可能とはいえないものでまだ ないのである。 日迄は初代仁清生存説をとり、 の自筆秘傳書「陶工必要」に記載の全文を信奉する 七十三才時で非常に確実味を帶びてくる。即ち古御 二年は七十四才時であり、宗和茶会記の正保五年は 人々があつて、それによると元祿十二年卯八月十三 即ちこの年代時の作品は他例より見てかなり稀有 しかるに一方に大乾山の人格を信ずるの余り、彼 何等の疑義をはさま

産土地等の分与も受けたが藝術三昧、作家生活に入にして復情、初めは富豪の三男坊であつて相応の資今や公認された形となつている。又彼の人格も高雅 となる九十一才位迄はまだ気易く認められるが、百年は九十一才、延宝六年は百〇三才、八年は百〇五才 など書き残すものではないと全幅的な信頼を受けて その誠実な人柄を高く詳價されて彼がインチキ傳書 しかし縮方乾山深省の筆跡は多くの他例があつて百二十四歳となり、俄然事は神秘の世界へ飛躍する 才を越すと不可能とは云えぬが少々眉つばものらし これらを「振り出し」より通算してみると、寛文六 ある。もとよりこれらは確認はされていないが一応なるものに「寛文六年説」延宝六年及八年説」等が つてからは 淡としてよく清貧に甘んじているか くなり、元禄十二年尚未だ存生なりとせば隔に正に そこで今日迄現れた「仁清死歿年説」を見ると重

紙 志野香合

昔の出來と思えない新しさがある。 並と共に実の方もなか~~いゝ図案で、三百六十年 がと共に実の方もなか~~いゝ図案で、三百六十年 銘手車

口絵第一頁上段 鼠志野檜垣茶碗 (口径四寸五分高三寸)一段 志野檜垣茶碗

であつて、結局志野へ影響したものとは思うが、高ある。朝鮮李朝期には、この図案をよく見かけるの志野特有の姿をして居るが、高麗のそれは謝顔形で志野特有の姿をして居るが、高麗のそれは謝顔形で えている。 絵である。面白い対象をなしている。白の上釉がと かれていて片面は寫真の通り、鼠志野と異つた檜垣 下段の絵志野茶碗の模様は、 よほど日本人には好まれた図案であつた様である。 麗檜垣茶碗が朝鮮役以後の日本の注々出來とすると るが、大会には三碗も出て驚いたことであるが、こ 深い。風志野檜垣茶碗と云うものは少ないものであ 実に見事な出来のものである。士やはらかで、見込 鼠志野檜垣は図案化されたもので、発色理想的で、 たもので、二種の檜垣模様を比較的に出して見た。 昨年の秋季大会、志野、織部、黄瀬戸展に出品され 一面には太い一線が引

う譯である。とすれば仁淸譲渡の秘傳書の記年が元いる。即ちこの書の中の仁淸項目も全部眞なりとい

れば仁清譲渡の秘傳書の記年が元

藤十二年だから初代仁清が正に生きているというの とすれば私の弦に記錄した「承応、七十九才造」

ないことくなる。大変なことである。 の九十九パーセントは偽物なり!と絶叫せざるを得 なる。それと共に今日迄三十年間鑑て來た仁清作品 鑑識眼を失うこととなり、仁清に対する自信がなく と信じている。若レコレが偽物ならと地ば私は私の 振り出しの作柄は先述した。私は今も尚質物なり 「振り出し」は偽物仿作なのであろうか?……

求が如何に至難にして労苦多きものかを知つてもら この孤証を以て厚いましくも全般を律しようとした かつたのである。 の足場固めの一ポイントとしての中間報告を行いた いたかつたのである。と共に玆に一投石を行い、次 のではない。実をいうと「仁庵記年記齢物」への追 しかし、しかしである。私は最初からこの一例、

私もそこまで自らを失つではいない。今後何年が十ようなどとは厚顔無知と云われても仕方あるまい。大仁清と取組んで十年や十五年でその成果を擧げ 年齢物が現われたときはどしる一御発表願い 休まず悠々と研究を持続するつもりである。若し記 何年か何十年かは知らぬが、結論を急がず、しかし

てなるべく「余計なこと」をしないものである。 であるが、大体、偽物、做作というものは原則とし この一小振り出しもある趣味人の厚意によるもの

> る。云わんや年齢や年号は書がずとも済むも される、即ち馬脚を現わす率はぐんと増えるのであ その押方、字形、書風、印寸法の諸点から更に極鑑ら億物作人は戦々恟々である筈である。押印すれば でも猶土と釉と成形技術の三方面から検討されるか 例証すると絶対必要でない限り印は押さない、それ セッカイである。 な承応や七十九才造などの記入は洵に余計な馬鹿オ 「仁清」、印一個で「仁清」に化かせるのだからこん ので

確信している。 行きあたつて私は実に多くを悩んだ。しかしそれは 信條が立てられるのである。だから此の振り出しに の年齢を記した模し物などおよそ意味ないではない 多の偽物や模し物を鑑て來たが、記年行年物には殆 か。故に反語として「記年物」には偽物少しという んど偽物を観たことはない。例えよい意味でも他人 私は過去に於て「僞做造作家傳」を書いたし、幾 ロックではない、私は道は他に通じて いると

祿頃の初代仁淸記錄は私の未定稿年表から見れば甚 だ少い。私はもつとよく考えよく蒐めて更に追求の 始するこの方法は適確で今日迄私の発表した数々の が續発しない。それから適当な時期に整理検討を開 する。すると一眞実」の年間には記入事項がどし して兎も角も見聞の全部をその所属の年号下に記入 手を新たにしようと思つている。(二八二二七夜) つかり用いるとややもすれば破綻が生じやすい。元 小研究は未だ破綻を來していない。孤証のものをう と、地える。不実の年間には殆んど記入すべき事項 私は古陶研究の一方法としてすぐ年表を作る。 そ



紅梅雅会の記

お濃茶の点て出し

描きたる小品ながらも念作が掛り、脇に宋白磁椀な 付の白湯を汲む。お床に隣組の青邨画伯近作紅梅を 同村の服部梅素、田山方南の両居士、円覺建長に連 に深き含蓄ある万能雅人 りの鉢に万年青の緑栗紅果鮮麗なり、主人はこの道 る山に対して、一座六客が揃ふ。お詰めを承つて寄 家、細野申三翁は都合悪く珍しくも欠席、御相件に 会に集うは、鈴木新吉、齊藤利助、瀨津伊之助の諸 久翁の営みがある。二月八日正午、北倉会当番茶 紅梅満開の北鎌倉の丘上に風流三味の大旦那岡本

香富を莊る、この庵王獨創の舞台裝置である。き、水器の位置に佐藤清誠翁の刀跡さゆる巣龍鶴の 心堂の表具昨日出来のホヤーへ、風呂先 屛 風 を 置旧交厚き古徑画伯より御年玉という紅梅の横幀・鶴 迎えつけあつてお懐石の席へ能り通る、

るに余りあるもの、酒盃は六客六様のとり変ぜ、 盛らる、鱒の唐陽は一段と美味、主人の得意や察す く名器と拜見、同席の瀬津兄は微かに笑み給う。燒物 津と火色明るき古備前、倶に雅陶堂経由のものらし 付、両椀は喜三郎の作らしく漆黑、酒次ぎに朝鮮唐 特ち出されたるは東大寺盆を折敷に万暦染付の向 めらる、高台梅花文様の鉢は古九谷の雄品い

(.9)



「志野·織部· 黃瀬戶展」 を願りみて

庵

樂しまれだことであろう。 方、織部を樂しむ方、皆各々が其の好む処に隨つて も企図されなかつた位名品優品が集められた、立派昨年十一月の日本陶磁協会の大会の展観は今迄一度 な展観であつた。志野を愛する方、黄瀬戸を喜ぶ

の観賞等か欠けていた。 るとか、又は雑器(例えば燈道具の種類)の面白さ の織部文様、型等を、向附を百個近く並べて研究す 然し、所謂一般公開の展観の欠点、例えば千変万化

るべきで名品優品より、より以上の注意が大事だと り土、釉、作行、文様、その線等をよく れた方もあった様ですが研究される方は是非手に取 る予定であつたのです。又別室の破片を見ずに帰ら 列品解説の時詳細を申上げる事にし又御質問に答え だとの注交。是れは確かに申譯けない次第で、実は 別を(はつきり解るものだけでも)入れて置くべき 又一般の方々の『到底買い得ない様な名品優品で淋 しくなつた。等の声も聞いた。次に列品カードに窯 く験され

好きだと云われる方でも織部志野黄瀨戸の美はどり 備前等々に見られぬ美! 中には自分は唐津の方が しても無視し得ぬ! 志野織部黄瀬戸所謂美濃古窯の良さ・ 到底唐津や

> 上に咲いた花なのである。 である。志野織部黄獺戸は長いり一古瀬戸の傳統の 民窯であり雑器の窯であつた。備前や信樂や常滑等店津備前等が茶陶として生まれる前は何処迄も所謂 土くさき素朴さは古瀨戸には無いのがその本来なの きりと工人の魂を、工人的風格を感得し得るのだ。 の素朴な愛すべき『うづくまる」と古瀬戸の『うづ 最古の陶業地! 印花の、 くまる』風の壺とを比較する時、素朴な內にもはつ 統を持つ陶業地・陶工の血統・陶工の魂・・ 利期の無数の茶入並に天目茶碗等々が頭に浮ぶる傳 美濃窯の前身たる古瀬戸! 又柳文様の瓶子、 弘仁時代に迄溯る日本 次に足

時も人でいつばいだつた。 ある。而もその態度はあれを視是れを視ブラー 低は半日以上、中には二日も続けて来られた方々も れた。今度の展観では短時間の方でも二・三時間大 青磁展や染付赤繪展の時は熱心に研究される方でも 1、入場者数は前二回と変らないのに会場は何 三時間、列品解説の後も一通り見ると帰ら

る何者かや!。 感ぜせしめる何者かを! 日本陶器の「温かさ」「親しさ」それは心の故郷を 血のつながりを感ぜしめ

扨てお茶を樂しんでるこの私は今度の展観をどんな

りしとかっ 『豆』、古色言いがたく二千年の星月を地下に健在し 信の一言、一座骸嘆聲を吞む。床脇の置物は漢鍋の 仰せなれど、この道の大家湖津 大兄は然 らずと 自 落疑あるこの家の至宝、古徑先生は若書ならむとの 付け一新、雄揖四辺を拂う白梅を描くは法橋宗達の して結構。 洗用の繪唐準筒は発色よく好ましき雅品である。 水屋調理方は円覚僧堂の大瀧君が出張、口福を満 大陸文化の歴史をといむ、故大塚稔氏の愛品な 中立ちは寄付の階上にて、これは又莊り

用いて一と先づお開き。 画の紅梅茶碗を始め、土牛画伯染筆の二碗その他を 御蔵帖登載の五器茶碗に負けて沈默。お薄は自作自 式新趣向を巡喫し一言ありたき処ならむも、遠州 生。点出しのお濃茶は新趣向にて一座の面々、く、眞簽手桶の前に桐木地棗、紅梅を描くは古く、眞 庵宗匠は蘆瀑と銘、 の新燒風志野旅枕に白き椿を無雑作に挿さる。 再び茶席に至り喫茶の事始る。 霰に宝珠文の古芦屋釜は時代古 紅梅を描くは古徑先 中釘は荒川豊藏氏 岡本

(10)

樂しき如月の北倉会も四時すぎ散会とは相成りけ 窓前の紅梅に春の淡雪繪よりも美しく、斯くして

(陶々庵生)

春屋 秋度吹得る落多的水力 圓鑑の墨蹟

溪宗陳、春屋圓鑑は戦国乱世、私は墨蹟を通じて織湾権沿月灌蘭の頃は天下泰午の御代、一期前の古 澤庵江月清巌の頃は天下泰午の御代、一期前の

中国美術専門のY商店のM君が 『日本の物は良く解りませんですがこの展觀の中で

一番良いのはどれなんですから

どれが一番だとはなかり う云うものには各人の好みが多分に出て來るから、 よう。此の展觀で特に評判の良いものです。然しこ 『そうですね、貴君の云われる通り最高の名品でし 『小部屋の床の間の鼠志野とそれから………』 れた物が美しさがはつきり出てることは一番で ~ 云えませんが今貴君の云

受けた。私は結局あなたが一番好きなのが ものなのでしようと云う意味の答をした。 部茶碗はどれが一番良いのか、志野水指ではどれ 又ある方々から志野の茶碗ではどれが一番なのか織 ……黄瀬戸はどれが……等々の質問を 番良い から

較の世界』なのだ。 謂鑑賞陶器から何時か離れた原因の一つは此の『比 扨て私にはどれが一番良いと云えるか……私が所

得る良さを持つた所謂鑑賞陶器の尊重は当然である 鑑賞陶器の場合同種類同質の物の場合比較対照で少 のだ、事実本当に良い物と並べて見くらべるのが一 身の美しさを鑑賞して行くのが本当の道だと云える と同時に傳来箱書書付等々を一應捨て去り物それ自 から云つたら強い明るい光線の下ではつきり比較し もあがりも良くそして一番値も高いのだ。近代感覺 つきり位付が出來るのだ。そして一番がやつばり形 しすぐれた感覺の所有者なら一番二番三番と割には

> 論が出るものだ。然し志野織部黄瀬戸を茶陶として 見る時は今の結論は決して正しい結論ではないの じではないか。鑑賞陶器の見方からみれば同様の結 線の下で』………結局私の挙げる数点はM君と同 で』『一番美しさがはつきりしている点で』『此の光 だ。『此の展観場で』『現在並んでいる展観品のうち い。但し、私の此の言葉には大きな但書がつくの 店のM君の並べた数点を一番良い物だと云うより無 それでは再び私にはどれが一番………私はY商 番手取早い勉強だと云われる所以なのだ。

戸障子窓の採光がどうなのか、茶室は今作つたばか半か六疊か、唯好みの席か、南向か東か北向か…… なら其の人がお茶室を持ち、お茶をやつている人な が或は織部茶碗が一番良いと云いきる事が出来るの 茶杓も同様皆みせてもらつた上なら、此の志野茶碗 津仁清等々どんな形景色のを持つているか、棗茶入 りの新しいのか古いのを移したのか。水指は備前唐 ら先づその茶室をみせてもらり。二疊か三疊か四疊 云うより無い。そして私にそれを決定しろと云うの をとれば『貴君ほどの茶碗が一番好きなのか?』と 対して私は志野の場合でも織部の場合でも茶碗に例 では茶陶から見た時はどれが一番……… か六疊か、唯好みの席か、南向か東か北向か…… …此の間に

も赫々と濃く出た画志野の方が刺戟を与えている。 のだ。そして反つてまわりにある强い線で書いた鉄 ら有名なあの茶碗がそれ程美しく好ましく見えない 私は志野茶碗の一群の内に広澤の茶碗を見た時前か 然し静かに見つめれば繪も赤みも実に落着いたその

> 反面、春屋を嫌つたと言うのです。天衣無縫の筆意期の茶人間にファン尠く特に宗和侯は仁清と親しき る私ですが仁清、宗和をも好ましく賞玩して居りま は春屋の高格を偲ぶに足るもので、隨喜して所蔵す 豊時代の後者を一倍愛好するものです。春屋は江戸

例でこの先、如何なる流轉あるやこの一軸……割愛せるを、昭和廿二年秋私の所有となりました。 招き一亭一客の茶事に用いたとの事です。松永耳庵 の尾主人の愛玩に帰し、東京星ヶ岡茶寮にて鈍翁を 庵に移り、更に茶友間野宗匠を経て、金澤の料亭山 の高足深澤聽松の所持せるを、加州藩薬御用亀田是 は山の尾売立会にてこれを落札、魯山人に乞はれて 秋風吹謂水 落葉満長安 の一行は宗徧門

□菊山当年男氏 方南氏の紹介にて黒田陶苑美術部にて。 らる」氏は、陽春四月陶藝個展開催を同郷田山 芭蕉翁研究旁々、作陶に親しみ居

□高橋、獺津両家のおめでた 東京美術俱樂部軍役 満里子嬢との婚約相整いたる由御同慶に堪えず 高橋府作氏次男の君と獺津伊之助協会理事次女

□東京陶磁器協同組合は東京都、通産省と共催し上 る展示会を催す。 及び製作工程実演、 野公園旧美術協会に於て日本陶磁器の生産状態 製品展観など可成大規模な

四月一日から十五日まで・無料公開

(11)

つまらぬ水火で、壺と花とテーブルでプラックは美 も茶庭茶室の構造採光に支配されるのだ。レモンと 木工品・金工品・繊維品等々の取合せに由る美、而 までも綜合的調和美なのだ。陶器のみでなく漆器・ にでも向付にでも同じ事が云えるのだ。お茶は何処指は必要ないでしよう』と答えるかも知れない。鉢茶室道具総てを験べた上、或は『貴君には志野の水に使う為選んでくれと云われたら私は前の答を述べ しい画面を作り出しているのではないか。 んだ事は始めての事だろうが、それではどれが一番 服しなから眺めたかつた。 つた。私はこれ等の器物を自分の茶室でじつくり一 裸にされている様な淋しさを感じた。 品物が可哀そ めるのならこれが良いと答えられるが自分がお茶 びた姿の良さ、 たら、鑑賞陶器として水指一個を 私は良家の生娘が藝者と並んで 七つも志野の水指が並

学の茶室ではそれが反つて『どぎつい』刺戟を与え目見えている方が美しく見える。ところが三疊や四疊もの、方が見ばえがする。美しさが强くはつきりと を心せねばならい。又茶道具屋さんも知つていて が澤山あるので茶陶を買っものは此の紙一重の違い が応々あるのだ。この点お茶と名品と両立せぬ名品 品誇示の亭主の心のアサマシサを感ぜせしめる場合 器に於ては、又展観場に於いては、画も形も力強い で良いのだが、名器即名茶陶ではないのだ、鑑賞陶 私は茶陶を以て第一とするのでは無い。名器は名器 いる様に見え全体の雰囲気を破り、又は名

> で優秀な鑑賞陶器愛好家で、なかく一高い名品を買きぬたの名杓立がある。それを知つているある友人 学世を捨て一人お茶を樂しんでいる人の処に傳世の

だ。鑑賞陶器での最良のキヌタと茶陶での最良の 日本の国土の雨下天晴と中国の雨下天晴は遠う 器の方々又博物館の方々に知つて戴きたいことだる。この事実は特に鑑賞陶が浮き上り、砂張や染付との何とも云えぬ美しい階が続な感じはなくなり木地の長板からすつかり器物 きした。そして『恐ろしいですね』と云つた。Bのうなり、そして二度三度置きかえては眺め、『解り 賞陶器と茶陶器との違いや茶の取合せ等の話になついので安心と満足を持つているらしい。そのうち鑑ませんねえ。』とは云いつゝも内心Aのより色が良 歴の茶室に澄みきつていてそれでいて落着いて気高 少し淡いけれど所謂理想的の雨下天晴の青磁では青 室に案内した。桐木地の長板、銀砂張の水指、染付 せ次にBの杓立をのせて見せた。Bは『ウ の蓋置を持つて来させ、Aは自分の内立をのせてみ た。娘の茶室の用意が出来たとの言葉にAはBを茶 所謂雨下天晴の色だ。Bは『やつばり肌に潤があり つを並べた。肌は傳世ではない と云つたがそれはキヌタ形の杓立だつた。そして二 お宅のを見せていただきたくて 色は良いつもりなんですが、少々心配なので キヌタの花入を買つたのです ので潤はないけれど 。』と云つた。花入 が傳世ではな 1 ム と

個』の陶器(陶器に限らず他の美術品に対しても) 然し私は茶人的感覚を最高と云うのでも無い。

さ…嚴密に云う時茶陶はそれ『一個』のみの存在は已れの肉たり得ぬ已れの実存たり得ぬ物への無関心を見出している。物一個の嵩高さを感じ知りことに を見出している。物一個の貴美』『佗の世界』を把握し、 場台が多いのを知つている。そして中にはそれ等の 心から畏敬し、又時には驚く事さえある。 かしている人々を知つている。そう云う ものを生活の中に、己れの人生の教養の資として生 の鑑賞に於ては、純粹鑑賞家の方が、より高い趣味 より正確な意識を、より鋭い感覚を持つて 私は悲しい哉お茶に入つて仕舞い、『調和の 今では其処に安住の地 人々を私は

蛇足に三度云う 青磁展も赤緯展も良かつたけれど、志野織部展の方が 性に合つている。そう云えば來た方々もブラリ 半日も一日も遊んでいたじやないですかっ

(12)

あり得ないと云い得るのだ。

はもう志野織部黄瀬戸は他の物は 『では自分は志野はあれとあれ、織部は『貴方の一番好きなのが一番良いのです』。『あの中でどれが一番良いのですか…… 『私は取合せの爲には展観場全部の物を持つても はあれとあれ、それだけ持てば本望だ私 りません」 総部はあれとあ

公

陶

尾

心を有する者は其名を知らない者はあるまい。
ろう。小生の注解する陶説は清代朱琰の著であ 疑問なしに理解し得る者は恐らく一人もあるまい。 拙稿陶説注解を之に連載することとなつたのは何 本陶磁協会に於て今回陶説と云う機関雑誌を発行することとな 小生の注解する陶説は清代朱琰の著であつて荀くも燒物に関 然し之を通読して全 かの因縁であ

容易の様に見えて実は極めて困難であることが分つたのである。其全なものはないからである。然し愈筆を執つてみると此仕事は一見念発起するに至つた。蓋し従来の訳解書は何れも一長一短ありて完 困難なる原因を挙げると、 大正十二年関東大震災の前後から陶説の解説書を書 直ちに陶説の原書を見たのであるから、 を得たであろうが、当時予は未だかかる参考書あることを知らず、 東洋の窯芸 Oriental Ceramic Art も出版せられあつたるが故に、 文に訳した竹泉の和訳本が出版せられあり、又ブツシエル氏の大著 注解等の諸書を悉く通覧することが困難であるこ 其後前記の諸書及び其他にも種々の参考書あることが追々判つて 等の書を参考としたらんには陶説の原書をある程度読解すること つた。当時日に本邦に於ては葛西因是の翻刻本及び之を仮名交り 顧れば予が初めて此書を見たのは四十五年前明治四十一年の春で はず、徒らに望洋の嘆を発して之を拋擲するに過ぎなかつた。 此等の書を探し求め又は借覧して得るところ少からず、 陶説原刊書及内外の飜刻、反訳及び 殆ど一行も満足に読解する いてみようと一

> で 陶説に引用せる二百種に及ぶ原典を通覧することが困難である 今少しく此等の事情につき述べておく。 如き容易に解釈を求め難きこと等

なけれ の窯芸、 となつた明版江西大志は何れも稀覯書である。而 飜刻書木米版、葛西版等も亦珍本である。ブツシェル氏の大著東洋 陶説原刊書、薛序本等は何れも稀覯に属する。 陶説の注解は殆ど不可能に近い 及びその底本と為つた道光版浮梁県志、及び更に其の底本 かも此等の書を見

当りて著者朱琰は恐らく一々原典を調べて此等の引用文を挙示した得ないのがあることは後述する如くである。案ずるに陶説の撰述にないものがある。此等の内には容易に其原典につきて引用文を確めないから此をみることは左まで困難にあらず、然し其のうち若干はないから此をみることは左まで困難にあらず、然し其のうち若干は 書から極めて容易に糊と鋏とを以て此等の引用文を引抜き得たので鏡原等便利な百科辞典が已に刊行せられていたから、朱琰は此等ののではあるまい。朱琰が此の書を書いた頃には欽定図書集成、格知 其誤を正すにも省略し難き仕事である。 の原典を排猟する必要がある。之は引用文の意義を正解す らである。然し陶説の注解を書くには如何にしても一応此等二三 の百科辞典的書物の引用文の誤記は其まま陶説にも現われてい が悉く正解していたとは無論考えられない。何となれば此等二三種 学に驚くことを止めなければならない。又此等の引用文の意義を彼到る処に散在しているのである。従つて吾人は陶説を見て朱琰の博 あろう。 陶説に引用 事実此等の書を対比すると彼が原典を調べなかつた証據が せる一百種に及ぶ原典の大部分は珍ら ち若干は る

さて愈筆を執つて陶説の注解を書くとなると右に述べた様な困難

方言等は後述の如く如何とも為し難きものである。

後に書いた本が先出の本よりも一層完備すべきは当然であるから、ろもあるであろう。諺に三人寄れば文珠の知慧と云うことがある。でも参考になることがあれば他に拙稿を成就する上に稗益するとこ 備せる良書であれば拙稿を出す必要はない。又良書でなくとも少しみを排除して拙稿を刊行する必要もない。若し塩田氏の書にして完ら考ふるに何も待たねばならぬ義理は少しもないが、然し強て其頼して出版するから拙稿は待つてくれとのことであつた。其時つらつ えて世に問う 疑問の水解せるものも少からず、 前記稀覯の諸書中鄰次一見の機会に惠まれたものもあつて、 良いところは之を参考とするに如くはないと考え拙稿は出すのは一つ塩田氏の書の出るのを待つて其の悪いところは排除し、書いた本が先出の本よりも一層完備すべきは当然であるから、あるであろう。諺に三人寄れば文珠の知慧と云うことがある。 機運が漸く熟し来つたかに思われたから、其準備にるものも少からず、昭和十五六年頃前の稿本に筆を 抽稿は待つてくれとのことであつた。其時つらつ突然塩田力藏翁から来書あり、陶説は自分が注解 参考に資するの 其間更に苦労の甲斐あり 之を公表するま 多年

誤解も少くない。塩田氏は文章の解読の如きは自分の任にあらず、りては杜撰、粗漏の個所が到る処に散在し、甚しきに至りては誤訳るは主として年表索引の類であつて肝要の陶説原文の解読注釈に至難い。少しは参考と為ることは無いでは無いが、其の最も力を費せ 自分は專はも力を技術的方面に致すと自負しているが、 難い。少しは参考と為ることはルス社から刊行されました。以近田氏の書は昭和十九年の大 いる以上文章の解読に杜撰粗漏誤訳誤解のあることを自ら力を技術的方面に致すと自負しているが、巳に対訳新 は無いでは無いが、其の最も力を費せ此書を見ると勿論完備せる書とは称し 「対譯新註支那陶説」

> 等諸専門家の有益なる研究が存在するにも拘わらず、塩田氏は一言サー、ハーバート、ジアクソン、コーリー教授、ドクトル、メロア を主とすと放言する如きは全く呆れ果てざるを得ない いのである。此の如くにして尚は且つ技術的解釈 廿世紀初頭にはヴォグト氏、其後 は其資料が余りに貧弱であ 加うるに

小生は技術家にあらず。従つて陶説の注解を試むるのも技術的方 がきものとを窮理弁明し尚自己の意見あらば之を採つて大方の批 である。勿論時に技術的方面に言及することもあろうが、其詳細は すべきものとを窮理弁明し尚自己の意見あらば之を採つて大方の批 である。勿論時に技術的方面に言及することもあろうが、其詳細は すべきものとする者ではない。其の目的とするところは陶説原文の解釈 14) をしたりして、漢文はよみ易いなどと人を敷き自らを敷く如きこと近頃某々二三子の如く読めない個所は飛ばしたり又はゴマカシ読み 問題に至りては之を一括後記して博雅の示教を待つこととする

陶説の著者朱琰の事歴及び本書刊

版黄跋本の黄錫箋の跋によると朱琰の著述は右の外尚ほ未刊書に説 文録。異韻学、琴学、 陶説の著者朱琰は中国人名大辞典によると浙江省嘉興府海塩の 陶説、及楓江、 笠亭と号し、乾隆の進士で阜平縣の知縣に任官した 湖海樓諸集ありと記してある。 古文清英、 詞林合璧、律賦夏課、学詩律速、 唐百家詩選等があり、己刊書には 又後述本書再

又其書齋には樊桐山房、書画船、 泊櫓山房、 友石

朱琰はまた回に工みであつた。墨林今話に記してある左の一條は る人が少い様であるから訳出する。

朱笠亭山水に工みなり

旨を究め、 尤も笠亭と莫道と称せらる。(墨林今話、卷三、二葉裏) 復た宗派の正を識れり。武進の董東亭(潮)居を海塩 て兼ねて山水を善くす。震況りて力を学問に肆まにして妻十一年)の進士なり。直隷自 法を得たり。 又秀水の張瓜田 (浦山) と遊びて画 (看雲) 棟と交り

此人の孫娘琬貞と以ふのは詩画に工みであつたが、後に湯雨生、で、五に相傾倒した。不幸にして喀血の疾ありて三十六才で死んだ。 を作るや、人争つて傳誦した。朱笠亭と最も善く、亦た山水に知名の士と結社聯吟して嘉禾八子の目があつた。詞尤も綺麗紅薫東亭は乾隆癸未(二十八年)の進士で塩鹽に住んでゐたが、而かも古健は余りありと云ふている。又朱琰と莫逆の親 交 あっ 墨、筆々蒼老、其画品を擬するに薫香光(其昌)を法とするに似てひて設色を喜こばなかつた。墨林今話には其画古松を評して枯毫焦を善くし、其の宗南華先生(張鵬翀)の訣を得て、專ばら乾筆を用 を善くし、其の宗南華先生(張鵬翀)の訣を画は多く見ることを得ないが、此人は博学、画に至るまで衆妙を兼ねた人であつた、又 を善くし、其の宗南並先生(張鵬爀)の訣を得て、專ばら乾筆を用画は多く見ることを得ないが、此人は博学、詩文に工みで尤も山水物画に至るまで衆妙を兼ねた人であつた、又朱琰の私椒した張棟のは王麓台に讓らずと評せられた。加ふるに白拙人物、写意花卉、動気韻深厚、或は亦た濟色軽禧、尤も天趣を得たりと云はれ、其画品 張浦山は画徴録の撰者として有名であるが、其山水は乾濕互用、 いだのだと云ふ。 或は亦た澹色軽荷、 尤も天趣を得たりと云はれ、 山水に工 豆同り歌那し

> が其依嘱を受けて校警等の任に当り、之を枠氏に付して出来たと云が其依嘱を受けて校警等の任に当り、之を枠氏に付して出来たと云を撰成す云々。先生需次に詮に戴き、博に警校を属す。之を枠氏にを撰成す云々。先生需次に詮に戴き、博に警校を属す。之を枠氏に大中亟吳公の憲署に餔す。因て悉く景德窯器の製法を得て陶説六卷 ふのである。而して其出来上つたのは鮑跋によりて乾隆甲午郎ち三 跋によると 塩の 甲日事 朱笠亭先生は経世の才也。 朔新安後学鮑廷博 亥の歳、 ある。 九年歲次甲 ٤ 江西

氏の所藏にある。南画津梁と云ふ本に其の木版刷の縮図が載せてあ因に朱琰の描いた画は小生の知る限りでは唯一の例が備前の大原十九年(西紀一七七四)であることを知るのである。 (15)

を 一は説今と題し 本書は六卷からは 著者の考証を附記してゐる。 の大要を、又後者は同地に於ける磁器燒造の方法を敍述し、之に、半に至るまでの時代に於て景德鎭に於て磁器を燒造せる沿革及器 前者は清朝の 清朝の初めから著者朱琰の生宋せる当時即ち乾隆の上題して更に之を鶴州の今窯及び陶冶図譜二十則の二ら成つている。

代に至るまでに造られたという焼物の原始に関考工記、韓非子、史記、礼記等の諸書に放きて 章に於て周書、 卷二は説古と題して、 物原、 納珠、呂氏春秋、 礼記等の諸書に就きて太古神話時代から三 更に之を原始及古窯の二章に分ち、原始の 説文、 古史考、 春秋正義、

而して古窯考の章に於ては唐の越州窯 均州窯、磁州窯、 官窯、 建窯、 修內司窯、 山西窯 哥

に著者の私見を以てしてゐる。 に多少の考証を加へてある。 叉諸書を引きて其特色、 吉州窯、象窯、蓮窯、 E書を引きて其特色、鑑別方等を述べ、又之に附する五代及宋代に於て有名であつた諸窯につきて其所在 後周の柴窯、 宋の定窯、汝窯、

正德、 挙してある。 明代に於げる景德鎭窯の焼造法に関係ある記事を諸書より抜きて列 饒州の明窯の章に於て景德鎭窯につきて供武、永楽、 卷三に説明と題して、 嘉靖、隆慶、万曆等の変遷を述べ、造法の章に於て主として 更に之を饒州の明窯及造法の二章に分ち、 宣德、成化、

泰尊、 周器、 挙げて之に考証を加へてある。 其他太古代から六朝末迄の諸器にして諸書に散見するものを 漢器、魏晋、 南北朝器に分ち、多くの古書を引きて缶、土畑

卷五は説器の中であつて、唐宋元の三代に亘る器物で諸書に見ゆ

六の三卷は説器と称し、卷四は其上であつで、唐虞器

H

じ織部デー けに少々へいこうもしたが意を決し芝白金の山里庵に御招きせり、 寸した失言から協会の御歷々を御招きせざるを得なくなり相手 一作を案

部馬上盃 **焙物鉢は織部菊形手鉢、强肴は小形の手鉢、徳利は柳の絵の織部、** 織部火入を用り。会席は手料理にて向付は梅沢老遺愛の鳴流織部角ツナギ、 万歴染付の筆を飾る。煙草盆に其の昔京土橋老が大師会で大自慢せしという瀨部印花の瓶子に我が庭の花を生け床脇には織部琴形硯と織部鯉の水入れに 全て半農流にて客付会席とし床には宗達下絵光悦色紙の幅を掛け花生は古 酒乔は織

ル客より際あり クこれはり

水指は織部手付水注、茶盌は織部黒、茶入は織部耳付、茶材は、相客曰く **驚くのほかなし、香物鉢は輪花の小鉢、引続き田舎まんじゆうにて一服莲上** クマチス、ピカソ、何者ぞク 亭主気焰を撃ぐ

ク織部ならんク 御名答 と答う

監置は織部竹の節 ク御茶名はオランダ?ク

南蛮渡来ルと受け流す

一同爆笑、織部公は有名なるキリ ン信者なり、 お歴々歸途山里庵宿

自信のある陶磁協会同人天狗達も鼻端を挫かれ、あぜんとして驚高しの態。 半農軒主人の御羽きに預り織部品々の御道具名品にて御饗宴織部に多少の

客、 Z.

岡

忠

成

膾を拔かれた気味であった。 同家にあった 重美の影 影青瓶子がありとれ亦重美になつているが、 の初年に翁が入手され、永く奈良、東京にも寄托し との傳があつて同坊に傳わつていたそうだが、明治 その由來などきょたいものと思つていたのだが、何 青瓶子は、先年指定された当時、傳世とのことで、 かで名刺にも「つんぼ」と刷りこんであつて、些か な尊皇家たると同時に大の数寄者で、 して暫し寬ぎ歡談したのであつたが、辰巳翁は熱烈 紅葉しかけた如意輸寺あたり一帯の山々の絶景を賞 意な櫻花壇の辰已長樂翁を訪ねて、招ぜられるま」 まだあるのかも知れない に今上陛下行幸の砂ゆかりの広間から、谷を隔てく 与軍郎さんに誘はれて吉野に遊んだ。保田さんの懇 たとのことであった。大和では談山神社に傳世の あつたがい 道明寺へ引越して間もない昨秋九月、櫻井の保田 委吉が吉野の花見に来た時櫻本坊に寄進した 何国何時代のものとも判らぬましであ お耳が遠いと 他にも

海外貿易にあり、大和を中心に両翼に河内、和泉とたが、保田さんの意見は面白く、南朝の経済地盤は 翁や保田さんの間で南朝論議に一しきり花が咲

茶碗」を拜見した時、

器あたりがなおあるかも知れない、笑つたことであである。こんなことで、或は大和当りに古い中国陶 内の熊野海賊というのも、要するに当時の密貿易者 の堺、 たというのである。右翼で有名な菊池武夫氏の九州 たわけで、初めの頃は海上貿易權は南朝が握つてい る。 ら先年中国の熊物が澤山出たとのことである。和泉 の旧城内には一時鎭西將軍の居た跡があり、 伊勢の安濃津、大湊の諸港を抑えていたとす 殊に九州の鎭西宗軍は直接中国と貿易に当つ 海外交易も考えられないこともなく、 そこか 南朝圈

釜があつ あり、仲々の由緒ある作りで、庭にも変り型の織部見の某旧家に招かれたが、同家には古い席が五つも れたオランダの四方人色繪香台が、堺の某家が幕末ていて興の尽きるのを覺えなかつたが、中でも出さ 燈籠があつたりして、その傳来の程が偲ばれたので たそうである。松屋源三郎の茶杓というのも拜見し大分当時の注文品の残りがあり、馬上盃などもあつ にオランダに注文したものな一点で、某家にはまだ た。御主人は歴年の仲々の皮肉な数寄者で話を伺つ ちよいちよいある様で、同家にも古唐津が一碗あつ 茶人の間では喧しい。同候傳来の茶碗はこの辺にも である。綺蘭候は繪も旨いが、茶杓もあり、北勢の ろしき古月樓へは綺蘭候もしばしば遊んだとのこと て有名な本多綺蘭候の旧領で、同家の二階の眺望よ あるが、同家に櫻本坊傳來で櫻本坊の字を鋳出した たが、御主人も茶杓というものはどうもとニヤニヤ た。この辺は伊勢神戸の城主で数寄者とし 先日大雪の日に南河内の奥の天

笑つていられた。

見直すと、仲々意匠の変つたものもあり、樂、唐津古コレクションを拜見したが、十数年振りに更めて とで、 があれば寄托陳列して参考資料としてもよいとのこ 三島、雲鶴等寫し物も多く、興頗る深かつた。場所 先日また伊勢の四日市では、久々に 土地柄是非実現して頂きたいものと切望して 川村家の古石

つたものでは、鉄繪で仲々筆が利いてあつさり根引ので、この三井家からのものが可成り来て居り、変領筋で松坂に出た三井家は三男筋に当る由)の出な村の三井家(三井氏が江州から伊勢に移つた時の総 「松風」の彫り銘と「志」の丸印を捺したのがあつ やつている様だ。また赤樂のやゝ大きい舞鶴香台で 万古の御所丸寫しもあつたが、御所丸寫しは方々で 特別に陳列館も出来ている。御多忙の処寸暇を割 先代からの諸国郷土玩具のコレクションでも有名で 臘法隆寺近くの旧家で妙喜庵傳來という「利休割れ 誰れの作か知りていものである。樂風といえば、旧 が鶴の彫りなど素朴ながら仲々雅味のあるもので、 が捺され、箱に「伊賀茶碗」とあつた。それから古 松を描いた一見京風の茶碗があり「いが」の小判印 二期に属するものと拜見した。御令室が一志郡雲出 地、釉はまさに長崎堅手と同様で、割高台は所謂第 変眼福であつた。御所丸は他のも同様であるか、素 小堀家傳來の割高台銘「はなびら」があつたのは大 て下さつて一部茶陶を拜見したが、無地御所丸や、 帰途宮田の伊藤蝠堂氏のお宅へ寄つたが、同家は

(17)

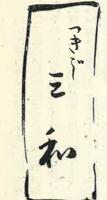
たことを知りたいものである。 準あたりの作のようにきいたが、これもはつきりし の丸印のものがあつたが、郡山の茶人の話では、木

猛暑といえども冷風汗を知らない景観である。 名古屋城が見えた相で、思わず快哉を叫びたい程で 側に延びて山裾の中央にはるか伊勢港を隔て」昔は 命名されている位に、湯の山温泉隨一の眺望で、兩 大まかで出色であつた。增築階下は望城亭と前から 類まれたシャクナゲ意匠の床脇陶製透し彫りと欄間 の出來栄え拜見のためで、作は削りの痕を生かして これは片山さんが寿亭の新館增築に田中支配人から 郎さんと諏訪驛で落合い、湯の山の寿亭を訪ねた。 伊藤家を辞してから阿須賀陶苑に岸園山氏を訪ね

春秋の窯元訪ね旁の散策にはさぞと思われたことで ある。室町頃、五條山一帶には奈良の諸社寺の土器 の京から牛里程の道すがらの眺めは仲々に風情で、 主の古瀬さんや楠瀬日年老にもお目に掛つたが、西 室町の造りとの由であるが、いかにもと肯かれた。 屋の旧宅から移築したものだ相だが、専門家の話に 院にあつた、桑名の画僧で復興土佐派の流れをくむの書画類が部屋々々を飾つているが、湯の山の山岳寿亭の先代が仲々の数寄者だつたので、永年の間 付は古調愛すべきものがあつたが、先代が郷里名古 の三席に続いた、江月の心月輪三字額のかよつた寄 綺蘭族の三幅対が拜見出來たのも嬉しかつた。池畔 花の舍唯念の描いた板戸が注目されたまた。土地柄 正月には始めて五條山の赤層焼の窯元を訪ね、窯 寿亭の先代が仲々の数寄者だつたので、 例えば「大乘院方土器座」も「藥師寺八

> 赤層焼の源流も溯ればそこら辺りまでも辿れよう。 山近傍は室町以來奈良附近製陶の中心であつた様で 印(永祿元年歿)も「春日土器作手」と記され、も以来有名な奈良風炉の産地でもあつて、永樂初代宗 幡宮之上山キワ在之」と記され、この辺はまた室町 とはこの辺に住んでいるらしい。そんな次第で五條

関係も今後大いに諸家の御研究に俟ちたいものであ 詰の兵站部の要務を帶びて暫く郡山に滯 在し てい絶無とはいわれず、殊に大阪の陣には遠州はまた后しても、父正次も相当数寄者だし、五條山の因緣も 云うがこれも面白い説である。 る。一説に、五條山は風炉が特産で、遠州関係も主 て、その間五條山にも近いことで、赤層と遠州との として此の窯では風炉が多かつたのではないかとも かれているので、この時代は遠州も未だ少年の頃と その後遠州十六歳の時には父共々松屋の茶会にも招 父新介正次も秀長に從いて同年郡山に移つて居り、 るが、今後再檢の要もあろう。それから小堀遠州の われる。与九郎印の雲華など一概に深草とされてい 無稽とも思われず、反つて大いにあり相なことと思 だが、彼も仲々の数寄者で、宗湛なども招かれてお り、土風炉師与九郎を招いて云々のことも全く荒唐 大和大納言秀長が郡山に入城したのは天正十三年



眞 (2)

1絵第四頁 三頁は久志氏の本文中に記され 下段 赤織部土瓶形水指上段 黃瀨戶蓋向付

映えている。(徑五寸—四寸七分) ににぢみ出て、かすかに緑色が黄色の地色に美しく らずにか、内側につけられた銅釉のタンパンが外側絵をつけたい所だが、それをやらず、知つてか、知 て見て蓋裘実共に、上手な線彫で模様を現している つけている。これは実にしやれた表現で、蓋をあけ ところにこの器のよさがある。本来からいうと外に 陰刻の模様なく、只蓋のつまみに菊花を浮彫にして て、好事家を大いに喜ばせだことだつた。外側には 大会では、この黄瀬戸蓋物が五客そろつて出陳され

(18)

実にいいものである。半面亀甲文が大き く 赤 白 二 ぐれていることも確かで、図案、造形から云つても窯、太平窯にすぐれたものが出來ている。技巧がす窯、太平窯にすぐれたものが出來ている。技巧がす なしている。本來の目的では水措ではなかつたろう が、現在水指として使用されている(高さ九寸三分 ぶり流されていて、腰の赤味のある釉とよく対象を 交互をなしている。手及口、肩に綠の織部釉がとつ 重にくまどられ、半面藤花らしいものが太い白線と ものであるのに、在來茶人、商家では一段値を下げ 織部で最も美しいのは鳴海織部と呼ばれている手の

愛 0 古 田 紹

いる。所が何本目かの一り私の顏つきを見守つてぎに軸をひろげる段にな

である。やがて、次ぎ次

物からそ物かの意見さえわかればいいといつ

品物を買う相手とは考えていない。まあ早い話が本うとしたものらしい。客人はもとよりこの貧害生が 誰から私のことを聴き、何かの底意があつて見せよ 速書齊に招じ喜んで拜見した。この見知らぬ客人は たら見て貰いたいというのである。好きな道とて早 来訪を突然らけた。数幅の懸物を持参し、暇があつ まり昭和二二五年の秋と記憶するが、見知らぬ人の 幅は全く予期せぬ縁で入手に及んだ。一昨々年、つ

愛滅の一幅に以天宗清の自画山水図がある。この

なものだとピンと来た。なつた。こいつは聊か味

軸をひろげられて私はう

しばらくしてから恐る恐

風去断、雪山労々樹梢斜」 **渡魚舟又隔家、楊柳枝從** 部に「飛行小路是湘崖欲 タリである。右よりの上 はまことに茶席の床にピ さからいらと縦横の寸法 ならない。この幅の大き で一応の説明を加えねば

ない。 え、村家が点在している。幾本かの楊柳も巖盤に生ている。巖頭の後部には遠く山嶽を望んで竹林が見 道人が柱杖を持つて巖頭に立ち、去り行く船を眺めと以天の養があり、宗淸の朱印一つがある。画は一 と同じで、以天の号である機雪とも讀むのかも知れ い墨印が一つある。これは古画備考に轂つている印えている遠景をなす山嶽の嶺近くに判読のむつかじ

突嗟にこの秘冊のことを思い浮べた。いくらかあせと。この秘傳は恐らく今では通用しそうでもないがい素振りをし、落ちついて、軽く値をきくことだね

である。買いたい、欲しいと思つたらまづそつ気な 且つて一先輩が私に骨董を買うコッを傳授して曰く ある。瞬間によし自分でも買える代物だと思つた。 るこの軸の代価やきくとまあこれこれだとの返事が

ぬうちにふところに手をつき込み、財布を出してな末経験の悲しさ、とても出来るものではない。知ら

がしの代償を支拂つた。これが大いに愛蔵自慢あ

る心を押えたものゝ然しそんな素振りはしようにも

でなくては到底画けるものではなかろう。以天は大 本の線が如何にも強い。この線は以天のような人物 此山水図の見所は一道人のつく柱杖である。此一

> て淺くはなかつたであろう。この一幅から云つてもあつたようにも思われる。それに風雅の噂みも決しであつたと云はねばならない。書風から見て禪の道であつたと云はねばならない。書風から見て禪の道である。先づ当代一流の禪僧 たりが割愛を望んで、よだれをたらした代物かも知幅を茶事に使つたのではなかろうか。或は不味公あいであり、蒐集家でもあつた。この庵主が屢々この **隨分いかがわしいものがあり、私のこれまでに見た処が心にくい程現れている。大体、以天の書画には** 小田原に趣く時は自ら城門まで出迎えたという め、この人を開山として迎えている。氏綱は以天 正宗大隆禪師と特賜された程の人である。北條早雲 **範囲では、この愛藏の一幅に到底及ぶものはない。** 全体の調子が何んとなく優雅でいて、然も洒脱した が歸依し、遺言によつて氏綱が小田原に早雲寺を創 徳寺に住し、後柏原天皇、一説には後奈良天皇から 醉庵(花押)」とある。 白醉庵芳村観阿は一代のめき 卷きどめには「山水之図、早雲寺以天和尚自画賛白 それに驚いたことには箱の字は白醉庵であり、軸の から

はない。 し、奮発して買つたのであり決して掘り出しの類でりものである。とは云え私としては囊中をさらけ出 てビックリしたのである。これは全く天からの授か を知らずに買つたのである。買つた後でこれを知つ 実際を云うと私はこの軸が白酔庵所持であつたこと

寂、芳村観阿は嘉永元年六月十九日寂、年八十。*以天宗清は天文三年(一説に同廿三年)正月九日

(19)

災難は女房、子供にふりかゝるが、この軸のよさが 前に顯れ、苦労な思案は忽ち解消したわけである。

わからぬ女房子供語るに足らずの自負心がウッ

いささかの後悔もない。

至極さらり

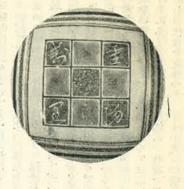
とした ボッ

気持である。金持ちは金があり、何んでもさつさと

偖て読者にはこの幅の自慢がわかりそうもないのうものらしいが、先づこんな気持であろうか。

かの思案を經ること数日、この一幅が突如として眼い、女房子供の着物を買わんが、或は書物を買わん

の以天宗清自西登山水図である。丁度原稿料を貰



茶の湯好日会 办 けある 記

黑 田 陶

雪村友梅の墨蹟光る 柴庵の田山方南氏

である。料紙は梅花図の蠟牋紙を用う、加藤犀水博 にして、重美、友梅の墨蹟として現存唯一のものム光を放つ。聴けば伊藤文吉氏の北方文化博物館所職 由にて友梅の郷国越後に保存さる、も縁と云うべき 墨蹟研究家田山信郎氏の出盧である。今更に賞めそ 橋春光を漏泄する処、 逕淸寒鰈未だ知らず、 も月並、 この人この日この幅、暗香ならぬ清 政に一両の枝に在り。 暗香時に送ひ好風吹く

签は古芦屋鎮形、信長公が松永弾正に贈りしとい さりなから古色愛すべき佳品、水器は砂張

> 漢作を倣ふ作意に擂座が愛らしい。大徳寺饅班の温 み充分なると薦め給ふ菓器は徳治二年銘の茶桶。 たらではの新茶の湯でもある。茶器が春慶とありて さ、と簡書ある針屋京春の珍品、銘に「さんは」とあ 茶を粉別碗にて拜喫、杓は慶長一 び來てのお心有難く、 体の文「さめが井の水」に因みて瑞鹿山の名水を運 の時代ある手付なれば水差に使ひしものか、寄付利 文化財保護委員会はこの人を得、日本文化の爲欣 影青の花器に洋蘭を入れて新風を漾ぐは、好日会 施主も膝を打つて同意せらる。 同席麥風翁の注に依つて三番叟よりならむと発 未は鎌倉時代後二條帝の御代。 財津大人のお声前によるお濃 一年丁酉正月三日造 德

あつた。 て尽くるなく、来会茶友の歡喜は並々ならぬものが 快を申し上げたい。この席この人の手練は縦横にし

茶の花の妙は天下一品 尚美庵は瀨津伊之助氏

して一歩も後れじの信念に燃ゆる如き体である。 も思えず皆んなで心型して居たが、御本尊は病中既日本橋のお店で風邪で休んで居られたので他所事と にあれこれ成算あり、今朝悠々と出陣方南翁に相対 くづく感心してしまつた。瀕津さんはこの前日まで会と日本茶道の最高茶事に劣るものではないと、つ (と日本茶道の最高茶事に劣るものではないと、つこの席にお取合せの道具を拜見して、光悦会大師

今更此所に吹聴の要は無いが瀬津さんの日常の居処 る。獺津さんの審美眼の優れて居る事は定評であり 瀬津さんは私の最も畏敬する先輩であり知己であ

を収竣、五月中発賣予定。は便利堂より、『あしや釜』を出版、昨秋好日は便利堂より、『あしや釜』を出版、昨秋好日あしや釜』を開展昨年度第四部審査員長野姪志氏

部に展観の予定。 点を四月中旬銀座黑田陶苑美術小森松庵理事推奨の同氏近

最明庵、雅陶庵、陶々庵にそれ」室を公開、高梨仁三郎、畠山一好日々春季大茶会 四月十二日、 観に研を競う。最明施、雅陶施、 庵にそれよ~懸釜と展、畠山一清両家始め、十二日、北鎌倉の各茶

地に陶窯を得られ、氏本来の陶藝に專念さるもか、初窯の出来栄えや如何、待たる、こるとか、初窯の出来栄えや如何、待たる、この藤唐九郎氏 瀬戸市上水野安土(やすど)の加藤唐九郎氏 う趣向にて新茶道文化を語らる、予定。 利助氏の好意にて、柴庵、尚美庵を開放、谷茶道研究会 暫く休会中の処、四月大会を齊藤

主唱、大黒屋主人等の奔走により句碑建立の潟県出雲崎町、光照寺境内に同地佐藤耐雪翁出雲崎に芭蕉句碑建つ 良寛和尚生誕の地、新出雲崎に芭蕉句碑建つ

松永耳庵翁の肖像山

品作として耳庵翁八十の寿を記念の肖像庵翁の肖像四 前田青邨画伯は今秋の院

瀬津さんを得て自らの師範と決めている一人である。 瀬津雅陶庵の席へ…… 兩大関の懸釜と、梅日和の好天に耳庵、添光、穿波 二月の好日会は会の代表とも申すべき方南、順津 諸老早朝より来会あつて仲々の盛況である。さて 学ぶことが余りにも多いのである。 私は身近かに

あるも 地曲にて木の香をとどめ、茶入に根來金輪寺の愛品 の茶はこの道の深奥を衝くもの。お正客は耳庵八十 餅を盛らる、寂仙宗匠のお点前を拜喫す。瀬津さん 合う。釜は古天明。古九谷の目覺むる程の名鉢に櫻 赤坂水戸幸さんより出版の を用う。茶碗は如心斉作釘彫花押ありて、 の意気は將に超人の業と云うべく、 物、花器この座の空気に寸分の弛みなき整然さ庵主 である。耳庵たらずとも皆この花には感服の選、掛 子王を挿して絶妙、さすがの耳庵も利休以來恐らく 華盆に青き竹五寸程に切りたるを置き、みづきと獅 安住院の所藏と記憶するもので、この一軸は鈍翁旧国宝繪卷のナンバーワン、この手は原、益田兩家と この花にまさるは無しと、賞讃を惜しまぬ出來栄え 蔵のものであろう。花入に渡金閼伽器盆と箱書ある 床脇には鎌倉時代蒔繪長方香箱を莊り、水指は木 お掛軸は地獄草紙繪卷の殘欠である。天下周知の 因にこの日は釈伽入滅の涅槃会に相当。 村は大心和尚作鉄棒とて如心の茶碗に取 「日本の樂茶碗」に登蔵 末恐しきかな。 頭巾と銘

明月谷は恒例の明庵氏

細野燕台翁の草庵

燕翁の際に從ひ本席に能り迎る。この席へは朝九時前に伺う、も早一先客既にあり

けるか 住吉の松ならねど、久にして君とねぬよのたりに な

色愛らしく、組まれた茶杓は鶯笛の銘ある玄々作。 主茶碗にてお淡を頂く。 漢に向ふ笹鳴に応ふ心。茶碗は玉器と瀬戸引出黒、 釘彫ある印花黄瀬戸釉の瓶に、 の寿老釜には前谿の清水が煮えて湯煙立ち、水器は 卷末らしく例の光悦方印は墨色鮮明なり、 重ね餅の如き根米塗の茶器は平形の朱 紅梅と白玉を。泽久 祖母懐の

れば退ぎて草庵に入る、 に敬意を表し素通りの寄付に名幅あるらしき氣配な 金の時代もの。その他一品一器に心を用ひ給ふ席主 青貝の盆に風情よく、こぼしは加島屋の藏票ある唐 の玉鬼、墨形、松葉と赤白青の色彩美しき甘味を唐物 しにて好日会に御協賛は有難く、お国の菓匠森八製 席主は金澤の裏流茶人として知られ、月々御持出 探幽の寿老を描きたるに江月和尚の賛 **先客は酒価にして宗偏流の茶家川井 穿 波 老** - 編洗の茶家川井 穿 波 老 な 燕老旣に上気嫌にて盃を重

杖を立てて開笑囂塵の中 隆々鶴頂の一老

如何に、 り出し示さる。釈伽ねはん像に集う凡俗の姿はこれたちまち紅顔、穿波老若返りの名薬ならぬ名幅を取川井、細野兩老と鼎座磐岩湯のもてなしを享く一盞 春風ならぬ桃李吹く徴風座を履ひて天上天

瓜ケ谷の山懐素庵は

服部梅素老の添釜 お詰め添光老人の席に割り込み入席、

藤沢寂仙宗匠 を 番円覚寺境内、 まる。 性円覚寺境内、 、樂々庵に移れら茶道々場を武藤町獨樂港に在りし処、こ この

発足のこと、次る。 市の愛陶家に依る支部の誕生は陽春四五月頃 大垣支部設立の気運 川瀬竹春氏努力に依り同

創刊号が出るまで…

正月の理事会が龍泉堂さん方にて催され、その節満場一致の推挙により佐藤、久志、黒田の三名が編輯場一致の推挙により佐藤、久志、黒田の三名が編輯場一致の推挙により佐藤、久志、黒田の三名が編輯場一致の推挙により佐藤、久志、黒田の三名が編輯に第一創刊号を出しました。不備の点は次々と改めて御期待に副いたく念じ居ります。

せての本変風夫妻の額も見え三鷹中板の席へ十客ヒザを寄

の渡米土産とて米国製のビカー び碗に土岐二三の杓とコマの茶器を組まれ替は逸翁 掲ぐる床を背にして古芦屋梅地文の釜、熊川の大さ にほふ梅の華今朝白たへの雪ぞ降りつく、の一首を 光悦の歌繪卷の卷頭鎗梅の地文ある料紙にて、 ~茶碗。

とりとめも無くお詫びを申上ぐの次号以下大いに勉を終ることとするの貴重なるスペースを駄筆に綴り 産の銘「木守」についての庵主の御説明も面白く、 くるところなく、茶壓五十年に至る添光翁の茶ばな しは御相伴の面々も興味深きものであつた。逸翁士 さて松永翁と添光老が話題を熊川に集中されて盡 和の木守物語は別の期会に割変して、 一応この

(21)



平戶 橋の陶茶 多 雄

国境に猿投山という標高七○○米ばかりの山がある。愛知県は尾張国と三河国からなつて居るが、その 地方一帶が花崗岩の風化「帶で、粘土、木節蛙

出するが、特に猿投山は、 硅砂が到るところで産

昔から製陶で名高い聚落が 傾斜地には矢作川 斜地に赤津、瀬戸品野等の 言ではない 全山が陶土だとい これ等のものにめぐまれて いる平戸橋やその下流の その西北の傾 つても過

知られて居る加藤唐九郎氏が伝窯して来て、 そこへ競爭中陶藝作家で古陶の研究家としても名を 來の製陶業者からは見捨てられて居た。 けば収縮の度が大きく、焼けば曲るという橋方面の土質は陶器材料として、誠に使い 橋方面の土質は陶器材料として、誠來広く利用されて居るのに対して、 1 /13 山の北側、瀬戸方面の土質が陶土として優秀で古 ョダ自動車工場の在るコ れた陶土を逆用して特色ある陶藝品を 17 モ市等の部落がある。 山の南 難く、乾剛の平戸 変つた

> 窯場で遊ばせて貰つた。 後生れ故郷の同じく平戸橋に居を構え、開に委せ 窯屋敷は俄然活況を呈することになつた。 た地は他にはあるまいということになつた。 (地は他にはあるまいということになつた。 私も襲といい、ショハイといいこれ程優れた陶土に惠まれさてこの土地の陶土を使いこなして見ると、資質 平戸橋古志戸窯の陶藝作家の間では、 緒になりここで作陶し始めたので、 世界の新し

最

賢 墨。 之 有 成 由 於心。 餘 干規 者 之勝於形 矩。 而 形 H 於手者 有餘 數。 者の 愈 人亦 多 愈 不 下 出

此蓋繩

野

來の作品、特に茶陶の一、熟術の動きが論ぜら 作品、特に茶陶の研究も忽せにはせられなかつ t! 嚼咀れさると共に日本古

文から新条道を標傍する藤沢寂仙氏に出稽古をお願の許されるお茶、作陶に役立つお茶という勝手な注ようということになり、提われないお茶、自由対議ようということになり、提われないお茶、自由対議 することになった。

柳瀬山莊に寓して居た藤沢氏から、 れには丁度私が以前在京中松永耳庵翁の手引で お茶を習つ

次いで京都から作家河村喜太郎氏が誘

平戸橋の 作家

3

ま

いに窯を築き、

これ等に續いて若い

たお茶で、 皆んなの前で試用せられて、忌憚のない批評が加え 茶巾 られた從つてここで行われたものは陶器を中心とし に突飛なものも出た。 て見てその適否が試されたo 平戸橋で作ら た。また誰かが他所で手に入れて來た器物は、 入れやら、また幾度も窯に入つて灰を蒙つて、 れる色べの になつたエ 私達は之を『陶茶』と称えた。 出た。電火しずの陶器が試作せられた。ときによりの陶器が試作せられた。ときによりの陶器が試作せられた。ときによりの関係が試作せられた。ときによりの陶器が試作せられた。というないというない。 れる陶藝品は一度茶室で実際に使 ブタを風呂の敷板に使つて見た 電熱風炉や、運び出しに使う

会を行つた。廿七年二月銀座の黒田陶苑美術部で展覧もあつた。廿七年二月銀座の黒田陶苑美術部で展覧 これらの結果を大方の人に見て貰おうとい

あ 杉浦芳樹君、 止まない。 この地に新茶道と新陶藝の育ち行くことを念願して 平戸橋陶茶郷は矢作川の流れを中心に風光も佳く 4、河村又文郎君等の時代が待たるへのでやがては此処に根を下した、加藤십男君 (22)

忘れられ魯山人作備前初集を観賞せられた。 金平、 御高齢の鳥田住矣氏態々東京より参会せられ、竹内 れ、臨時参加者を加え五十名に近く盛会であつた。 月廿二日、北鎌倉北大路魯山人窯にて例会が催さ 佐羽総太郎兩翁と共に春の陽の暮れ行く

の会は鎌倉梅の名所瑞泉寺にて大佛先生の御愛 是亦今回に劣ら

ぬ盛会であつた。蔵の御茶盌拜見の会として催され、

0

見

風呂吹に色繪薩摩の茶盌かなを養し暖炉の棚の齊瓮土器火響の凉炉据ゑけり簞 琅玕の 春寒う鳴る遊環や青磁瓶 あぜち模様の小碟に鮭の背場かな 杪欏一枝砧青磁の花入に 手炉に探幽皿を温めけり 臘や吳須の小皿に二三片 利久忌や明月盌によめ菜汁 ました。
ので、子規の俳句分類をのぞいたらので、子規の俳句分類をのぞいたら 一壺に薇薔遠棚 一寸思 仝 仝 仝 仝 仝 仝 仝 全 露

のがありま 夕立は晴れたるあとの小盃 醉さめや茶碗にうごく雲の峰 血鉢に京しさまさる厨かな | 俗として道具として扱つて居ります。| 句は陶器そのものに句の焦点を 合せ、つ氷に砕く凉みかな| | 蓼太 内に香炉重 葱太 猶 雪 始 嶺 全睡 ない

こな

類の句は新古数知れずありましよう、佳い句も澤山類の句は新古数知れずありましたら、大ていの場合陶器の説明や描写まで行が、それに大いの場合陶器の説明や描写まで行がすサラリと済ませるのが多いよっです。俳句はそうしたものでありともれで大いに結構なのですが、「俳句分類」には尙こそれで大いに結構なのですが、「俳句分類」には尙これなのもあります。

飛躍新日 0 本 T

(23)

小林逸 紛の 歸朝



や映画の実情をぶちまけてのお土産噺。 は洋行以前に増した元氣で滔々とアメリカのテレビ を見せないのは一沫の淋しさである。が御正客逸翁 会の臨時会であるが、畠山一清、 団伊能、梅澤曙軒、 払うといつた風景の中に、席に通つた面々は正客逸 人々の外套ぬぐ手にも雪が散つて土間でボント 一日の書である。逸翁歸朝歡迎の会とて、集いよる きよう北鎌倉でも雪はこん 服部素庵に小生といつた顔ぶれ。今日は延命 五島慶太、石井光雄、服部玄三、 田辺宗英、 內本宗額、 松永耳庵山老の姿 と降るの二月二十 齊藤寿福

のに反して映画の方は黒字といつてもハリウッドは 際は拡離器を間近かに借りらけてやるから 至極 便 いて家族連れで自動車に乗つたま、映画を見物し、 テレビは赤字でありながら株の方は上つている

「日本では出來ないが向らでは野外映画をやつて

門前軍羅のティタラグ……。」話は尽きない。

た墨蹟である。しかも中廻上代紗金の表装が中によ綠せしめての御提示とは、重きが中にも慶祝をこめ 茶一碗、御正客も御満悦の躰なるお茶碗は伯庵と た大德寺饅頭を頂いて、嫁女俊子夫人の御ねりの濃 香台は型物染付有馬筆なるも面白い。 ふかく 耳、それに紅梅と獅子王白玉をあしらつての興趣。 住明本の墨蹟としては、歴としたものが少い 図である。本席尚美庵の床は、中峯和尚の墨蹟お掛 雪はます くうつるのもこの幅の美であろうか、花生は古銅象 の語である。松浦家傳来と承るが、木文十九行、幻より求法渡航の僧、緣首座に向つて与えた帰朝送別 物拜見に及ぶと元の至大四年(西暦一三一一年)我国 忙しそう。懷石に入つてお正客の御健康に乾盃した。 は大燈の語錄出版の話で持ちきつて署名を取るのに と頗る御不満顔である。珍らしく現れた石井積翠翁 番樂し三ない人は御舎弟の後樂園主宗英老一人。 万歳の意でもあろうか。青磁筍花生にさした牡丹 げて本席に通る雪中風情も減多に出会はさない好 例の雲烟文様が外に廻らず見込に貯へた味のよ 雪でケイリンは丸潰れじや とよくなつて客の限を樂しましめるが

には法橋光琳筆にするところ大黒天の図で、 が天高くもろ手を差上げているのは、逸翁歸朝双手 この席は朝吹氏の柴庵に新築附けたしの廣間で、 しく、加らるに硝子越しに雪景色は

大黒天順で、床

の品、お茶道清水動園の箱書のよしである。替の一 きもの、銘を「月宿」と称して仙台候伊達吉村遺愛 々見応えのある一幅しかも正客の節朝に因 一降りしきつて休まない中を露地笠をか だけに

大黑と名付けたるは大黑頭巾に見たてムの意かの 面白いのは建水で、伊部の古作、庸軒所持にて銘を 茶材は石州作の煤竹で艶やかに冴え、銘を「伏見」 入は朝日春慶肩御で色形ともにしまつた柳営御物。 碗は一入の黑、休々齊箱にて銘を「曙」と申すの いうは、伏見の竹にて作れる所以か。変つていて

とお正客の聲に、庵主いさゝか照れ気味なるのも座 なつたねエ 「寿福庵も大分お茶気がす」んで取合せがうまく

候。……小田原始めて城を渡し候間、 へ宛てたる手紙で、その文中に、「城百ばかり取り申が掛けてある。讀んで行くと小田原陳中より大政所 すけ云々し 拜服の後広間に退けば床には

豊公の自筆消息の一 與であつた。 命をた

雪か覆いかぶさつて、えもいえぬ風情で相客二三氏 についた。北鎌倉の駅に出ると、円覺寺の杉の森を加えられ、「邀翁自傳署名入本」一册を土産に歸 庵主の肝煎で銘々に配られ、加りるに扉に翁の自署 と共にしばし佇立して眺め入つたことであつた。 であつて、氣に入らんので廃本にしようとしたの まい。最近に出版された強翁自傳がお留守中の装幀 何処かの城をのつとれとそそのかす謎では万々ある であろう。相客の囁くように、まさか翁にこれから ている逸翁への歡迎に庵主が持ち出した最後の馳走 と書かれているのも面白いが、要は今太閤と云わ 円覺寺の杉の森に を 途

方

古 陶

14

田

ッチリした胴の両面を領し、 徑六に近い不均整な円形が、

図太い高台の上に据り

や批作が並んでいる。 静かな雨聲に包まれた部屋の中に、くさしくの古陶 いの陶窯も詰め終つて、孤り凝つと坐つている。季としては暖い雨の夜である。追いつめられた思

雪は山堂を擁して樹影深し

修飾らごかず夜況々

義を思う柄ではない。 夜である。詩人茶山の居室には、澤山の蔵書が積ま 茶山の詩が泛んで来る。雪の夜ではなく、 れていた事であろう。陶工の私には乱帙を收めて疑 今は雨の

身近くある僅かばかりの古陶、それも骨董価値の低

彷っような心持ちを感じたりして、自慰しても見た い、また残念物のそれである。然し、茶山の詩にも

く置かれてあつた。時にはピアノの上に据えられて壺がある。この黒釉扁壺は、K氏の玄阕脇にながら常に心暖められるものゝ一つに、高麗朝の黒釉扁 みと、温か味を持つている。 た。所謂、堂々とした感じのものではない。端麗に た。何処に置かれていても、 ましたものでもない。 ヂカに觸れられる親し 美しさに心引

存在を持つているとも言いがたい。 かとすぐ想像されるものではある。 らタメたものである。愛陶家の方々には、ア、あれ ■ 黑釉扁壺は轆轤で丸い壺を水挽きし、その両方か 太鼓の胴を思わせるガ 特殊な博物館的

を持つている。高麗、李朝と永い世の変遷を、凝つ澤は失せてはいるが、それが却つて美味そうな肌味釉されている。久しく土中にあつた故か、釉口の光 方外人でもなく、限りない現世の活動力を蔵してい 老耄れた姿では毛頭ない。所謂風雅人でも、斜視的 悠々陽なたつぼこをしている翁のようでもある。 る慈しみとを持つている。世の学きしづみに徹して 決して玩弄を赦さない威と、田夫とも俱に胡坐出来 この形体の上に黑砂糠のような黑釉が、 佳麗な口造りを持つ首がついている。 もあろうが。押せば窪みそうな柔かい肌ではあるが と土中に忍んでいたのが、その境を醇出したことで

> たまり 朝鮮古陶に就いては云何する程の何物も私は持つて かでない。高麗朝においての佛教の侵しは背首出來れたように記憶する。今その著が手許にないので確 けがあつて「玄」の世界を持つていかつて內山氏が、朝鮮陶磁には佛 いる様に思われる。釉薬を発見する過程から言えば色相が蓄積され、諸々の文様が黒釉の内に蹴されて朗らかさを持つている。様々に工夫されたであろう を持つて來たことも史実が語るようである。嚴汎の るが、末期から李朝期に入るに至つで、邪教的変化 如上の言はたわいもない虚言であるには違いない。 黑釉扁壺の中には微塵の暗さもない。 は、明、暗を産出す世界と言う可きかも知 ない。玄はむしろ、明、暗を包む世界でもある。 ている。明、暗と対象されるところには玄の世界は 影を持つている。然し、玄は虚無とは次元を異にし いないが、暗影が必ずしも玄とは云い難い。 **う土に、土灰釉を入れて黑釉が出來ると言つたとし** もつと簡單な化学現象であるとしても、斯様に見ら のであるかどうかは、その人々の内なるものに俟つ 黒 になるかどうか。簡単に必ずしも文字通りのも ても、それが直ちにそれを使用する者に肯首出来る れない事もないのではなかろうか。益子の赤薬と言 ~見る李朝陶器の中には、何処か虚無的な暗 朝鮮陶磁には佛教的思想の裏付 ると何かにか 至極平明さと れない。

で自由に文様を描いている。 遮的な存在である。鼠色の胎土の上に、 ナ性を含有している土を化粧し、その化粧土を櫛目 いま一つは鉅鹿出土の鉢がある。 鉢の形は満開に近い蓮 黒釉扁壺とは対 酸化アルミ

外はない。

の聯想は、私の白日夢ではあろうが、無緣のものと奔放な蓮花の文標をも見る。鉅鹿出土の鉢と荷花と 磁 を感ずる。 像を聯想するのも、その御手の線と鉢とに通うもの も言い切れない気もする。 両の御手がふくよかに先づ合つている姿に、蓮花を まる事も事実である。指頭まで行きわたる脈々の鼓 馬鹿気たことではあるが。合掌の御手が私の魂に迫 から、綜合的にも部分的にも、そんな言分がすでに 像をおがむ時、まづ私の心に打つて來るのが、合掌 堂の日光、月光菩薩像を想うのである。あの二菩薩 孟を見ていると、全く方位を異にしたような、法華 の御手である。お顔だの衣紋だの、否々、お姿全体 るので、よく見られてい これも鉄構の魚文や牡ガ文などを櫛で割 花の四分の一 唐紙などにも見て來たが、開荷を思わせるもの 定鑑、刑瓷などの鉢、盞などがある。また自由 のは私孤りだろうか。鉅鹿出土の鉢から二菩薩 おのずから私の内に感ぜられる。宝珠の様な からでもある。 程の上部を剪取ったような姿である。 法相華、 ることであろう。 蓮花文様は支那陶 した鉢があ 私はこの

我用り激しさを示している。 銀わしているのに反し、巍然とした端麗さに、美醜象していると言えよう。編する。 扁壺は「玄」の世界を、 く異つた世界を表現しつゝ、帰一の世界を物語つてでロクロしている時もみつどける。この二古陶は全 私を視つがけている。私が眠つている時も、仕事場 高麗黒釉扁壺と、宋窯鉅鹿出土の鉢とは、昼夜、 如から産れ出た双生見にちがいない。 鉅鹿出土の鉢は「光」を表

> 久し、 0) してみる世界、白日下に晒されて総てを現わした世天地未分の混沌たるなかに、美悪、美醜が一に融合 倶に母胎を同じくするのではなかろうか。 祖先の遺産が血となり肉と育てられた漢民族

めて行くことである。れていると思われる二古陶を視入りつく、忘想を深れていると思われる二古陶を視入りつく、忘想を深をと腐心する現下の私共に、大きな啓示を与えて吳

(京都住

陶藝家新匠会同人)

徒らに狭い所謂自我の殼に籠つて、見新しいもの

嬰児であり、高麗文化の地下水を汲獲た両者であ

る

會費と雑誌につい

が会員の手許に行くのはあたり前で、若し行かな 読んで居られるだろうし、こんなこと位は万々御解加藤氏もかつて協会の役員であつた。だから定款は本陶磁協会は、雑誌販買業の団体ではないことは、 瞭然なこと申す迄もない。又その費用の大半が会資 つたら、むしろ違反であることは会則を見れば一目 とは一度でもあり様がない。会員である以上機関誌 負へ配布することは当然のことで、会員に强いたこ仮りに「機図誌」とさせていたのだから、それを会 仮りに「機関誌」とさせていたのだから、 りの事と思うのだが「日本美術工藝誌」を二年有年 で一言それに対して弁明しておきたい。社団法人日つた。」とどえらく誇張した文章を書いて下さつたの本誌でも協会当局に忠告したが、遂に容れられなか で、その不合理は絶えず地方支部会員から訴えられ る本誌の購読を会費に結びつけて会員に强いたこと 郎氏がその三月号の編集後記で「協会が機関誌であ と存じます。所が「日本美術工藝」誌主幹加藤袋一に対してはもはや返事を差出した事でおわかりの事 に対してはもはや返事を差出した事でおわかりてもらえないだろうか、との問い合せがあり、 支部の一二ヶ所から協会の雑誌と会費を別々に ح

> れ入る。重ねて申上げる。 重ねて忠言したい」とどうも甚だ迷惑な御忠言で恐 決して協会を大きくも重くするものではない理由を「協会が地方会員の会賛に依存しようとする劣針が る。隨分 様だが、見当異いも甚だし ないのである。協会が代理部と云う別の組織を設置 そり達引 1500 には 組織である以上、その研究の発法人の陶磁研究団体組織である以上、その研究の発たように日本陶磁協会は雜誌販売業ではなく、社団 をつけてどして一売つていることに対日本美術工藝社は雑誌販賣を業としてによつて賄われていることもあたり前 だから機関誌と会員の会費と云うものは切りはなせ 表の機関誌が、会員に配布されるのは当然である。 たように日本陶磁協会は雑誌販売業ではなく、 そこで雑誌を販賣する場合は自から別の話であ い、名案のつもりで加藤氏は云い出された いることに対して、先に云 いと云わねばならない。 前の話である。 いる以上定価

も重くもなりようがない。 上る迄もない、会員から会費が入らなければ大きく いるので会費が入らねば協会は成り立たないこと申 ているもので、従つて会員の会費で組織は 協会は社団法人組織であつて会員によつて 賄わ 5

一言お禮に申し開きをしておく (佐藤生)

石

黑 東 合

宗

慰先生

水先生

豊藏先生

○ 高さ凡 六寸五分位

藤 土 師 萠先生

九郎先生

重

陶陽先生

一対共耳一部かけ、鼻、口共すれて釉薬めくれあり

桐箱にて内部一対はめ込みとなる

釉藥、飴黑色、古瀨戶釉

货中中內鷹 田田瀨瀨陶篠佐小小黑久加加小大磯伊 屋野藤 原藤森山田志藤藤田三北宮原本土唐 田本村 津川 守三 作太 豊 __ 熙守雄匡治

中央区日本橋通三ノ一壺中居鎌倉市小町四三七銀倉市小町四三七の北戸幸内

河村喜太郎先生

富

谷

波

山先生

本憲古先生

北大路魯山人先生 イサムノグチ先生

> 会 員 名

> > 簿

らせ賜り度く切にお願い申上ます。を記の品、現所有者の手から行方不明になつておりた記の品、現所有者の手から行方不明になつており

古瀬戸狛犬一対

団 小奥尾 林 伊 洵 誠 盛 台東区谷中清水町 目黑区柿木坂二七 0

松永安左衛門 梅澤彥太郎 能 日本醫事新報社内中央区銀座東二ノ十一 港区日本榎西町一 目黑区緑ヶ岡二三六四 大阪府池田市建石町

理事長

 \Diamond

の通りです。・本号と切日までに御賛同いたといてる諸先生芳名左 ます。追つて五月号にくわしく発表いたしますが、

田

彦先生

田

靑 靱

邮先生

梅原龍三郎先生

玉堂先生

同を得ましてその記念小品展を開催する予定であり

協会機関誌「陶説」発行について諸先生方の御賛

「陶說」

発行記念

(27)

瀬

戶

部 展志の野 魅・ 力織 黄

支

Ŧì.

一元 (大学) では、 一元 新春に持たのうことのご

満で崩当の時に日 休間おの でそとのお演は、 の陳列室に鑑賞家で入れぬ人が百人、さむい美徳館の講堂に七八十人がして、『織豊時代の陶磁器』という題、瀬戸出身のゆかりの深い加藤土師、瀬戸出身のゆかりの深い加藤土師 人が題師

赤繪

日本に現存する名品を網羅した名品を網羅したであり、御早へを持して居りませた。

御し即る左中

申た刷印記国 み態情技流時

の染付と

一日本陶磁協会編集

文色色

●古備前 四 売切れぬ内に た記手持ちの

昭和二十七年九月発行 昭和二十七年九月発行 昭和二十七年九月発行 昭和二十七年九月発行 昭和二十七年九月発行 昭和二十七年九月発行 定価 四〇円〒一 定価 四〇円〒一

日本陶区銀座東二

磁ノ

京 56

小公园北

宅言 四 九 太小大岡大大榎江遠江內內內字上上海今井石井市五伊今伊井岩磯礒伊石飯今井石 田久場本倉塚本口 藤平田山本佐野村野井上黑村村十端川藤上田貝川端黒田泉上川 枝治三平亀一雄治郎哉夫蔵亮子輔多世次弘郎吉衞二志利毅齊博枝美志郎郎郎三幸

福

島

 \Diamond

藤時高

岡岡橋

良 了二城

美 一郎皓

藤

町台三町元 四 一四五五八四 〇五三八 ノ 八 八ノ 三 六

第含市山ノ内一三二〇 鎌倉市山ノ内一三二〇 鎌倉市山ノ内一三二〇 鎌倉市山ノ内一三二〇 大阪市美術館 大阪市美術館 大阪市美術館 今治市常餐館町八丁目 今治市常餐館町八丁目 今湖市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東中山下三九 大阪市東田山区東山七條 京都市 関西 京都市 関西 京都市 関西 五松坂 和今池 井石阿阿 淺跡赤 秋明青東楊熱青味部 吉之道 軒柏雄文 平康重 子郎藏雄三秋則郎

茂信正 方太義信 長善作 和三泰

リリリリリリリリリリリ特

塚武 田三古太岡岡井出伊飯安員

越井 辺道賀田副田上光藤田藤

司介 次平夫夫夫吉三三七稻素

恒良 武佐勝輝鉄茂正佐精美

11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 渡渡吉山安室南水松長戶 辺辺川田田清 野村

り 囑 リリリリ 監託 事

佐桂浜田嵯齊淺

雅三雄正保利五

彦郎彦雄二 助郎

又口島峨藤井

保 森

田

憲

義 忠順捨

三 行 成吉巳

十阪代央明附央宿一市田区寺府区区

村商事節

門郡道明寺町

田田

谷田

勝 大五

| 芦屋市山芦屋町四九 | 神戸市準区條原北町三 | 松並区永福町四二五 | 松並区永福町四二五 | 松並区永福町四二五 | 松並区永福町四二五 | 松並区永福町四二五 | 松並区永福町四二五 | 本で、水福町四二五 | 本で、水福町四二五 | 中央区銀座一東洋美術館 | 中央区銀座西東海路 | 中央区銀座西東洋美術館 | 中央区銀座西東洋美術館

刊

送

料

定B図

価版解説

H 本陶磁協協会規約

て見るとき首肯されるのであります。 見る国家の消長と、その時代の陶器の性格を参照し 代には陶業も栄えました。このことは東洋史上に国の爲政者に傑出した人材が出て国家が隆々たる 支那では昔から 「陶により政を知る」と云わ

切り離せないものだけに非常に深い意味があるのでの陶器の歴史について識ることは鷓物が人間生活と 流れの中に住む以上、 あります。 に祖先がこ かる資澤なように思われ勝ですが、吾々が東洋史の 陶器の趣味というを何か大衆から遊離した金のか れを作り、 またこれを愛用してきた東洋 その政治的意義を知ると同時

活動に便宜が与えられますので、これに力を得一層 集つて昭和二十年一月日本陶磁協会を結成しました きな誇りと喜びを感ずるものでありますが、出來る たる東洋の新古陶磁器を観賞研究助成することに大 を引立てたく思います。かくて吾々はこの世界に冠の蹇成助長に力を致し地方にらずもれた有為の作家 昭和二十五年文部省より社団法人の認可も得られ この意味で吾々は古陶だけでなく新陶及び新作家 多くの人達とこの欣を頒ち合うために愛好者が

それにつき次に具体的に会の目的、事業、企図と 概況等を記しま したから御参照の上御協力を

努力して会を発展向上させたいと思います。

日本陶磁協会の目的と事業

- 会報雜誌、 文献資料、 図書及び参考品の収集保存 研究調査報告書その他図書の刊行
- 海外へ我国陶磁器の
- 新作家の養成助長補助
- その他の目的達成に必要と認める る調査、 事項
- 右目的を達成するため次の事業を行う。 指導助成ならびに海外への紹介を目的生活文化発展のため陶磁工藝に関する 古窯跡の調査発掘 研究
- 研究会、講演会及び展覧会の開催

会 規

- るものとす。 本協会の趣旨目的を賛同し、定款の定める事業 協刀援助する個人若しくは図体によつて組織す
- 〈但年二回に分納も可〉 会員は定款の定める所により左の三種とす。 正会員、每年会費千八百円を納入すること
- 特別会員、 一口金壹万円一口以上を醵出す
- 各員は次の特権を持つものとす。 名譽会員、この 法人に対し特に功労のあつた
- 三 本協会の研究会、 展覧会、
- ことができる。 (但、所要の実費を支払うものとす 請演会に出席す

2 本協会の研究機関誌陶説が毎月無料配布され

- の実費頒布を受けられる。 研究報告書「陶磁叢書」及展観図錄等
- 古陶鑑賞、並びに鑑査証を受けられる。 規定の定むる所により
- す 支部開催の展覧会、 講演会に出席することが 実費を払うもの
- 出来る。 新陶磁器に関し援助並びに指導を受けること
- が出来る。
- (支部設置規定は別に定む) 会員十名以上にて支部を置くことが出来る。

支部 所在

台

支 支 支 部 部 部 支部 名古屋市東区東芳野町一丁目金沢市下本多町(北国会館方) 新潟市学校町通三番町(時岡二郎氏方) 新潟市学校町通三番町(時岡二郎氏方) (地紀光課內)

(30)

東金新海澤潟

(淺井產業方) 附山市內山下(陶守三思郎方) 外沿市常盤町八丁目(高橋城皓氏方) 今沿市常盤町八丁目(高橋城皓氏方) 高松市天神前一五八

高愛山岡 松媛陰山

支支支支 部部部部

愛媛県宇和島市元結掛一九〇香川県丸亀市松屋町(佐藤篤生氏方) 中愛信氏方〉

福岡県築上郡八屋町 (田中丸善八氏方)

福島県飯坂温泉湯野(佐藤盛氏方)別府市行合区立花通三福島良美氏方)大分県中津市(白木原氏方) (渡辺栄一郎氏方)

福島 支部中津 支部

豊福 前岡 予丸 土 亀 支支部部 支 支部部

6 5 班唐津入角皿 絵唐津秋草壺 絵唐津唐草壺 絵唐津藤絵皿阿房ノ谷窯

上添

頒価各一集 (十枚)

宋三彩蓮花文枕

5 正德白磁絲彩龍文鉢 3 成化染附蓮花文瓶 3 成化染附蓮花文瓶

代

第一集篇

(各十枚一組)

洪州窯茶褐釉盤 越州窯青磁合子 越州窯青磁合子

明時代

第二集

龍泉窯銹色斑文瓶

近世初期

第一集

音羽山出土品 有樂公遺愛品

9 8 7

本手瀕戶唐津茶盌

同高台図

不陶磁協会編集

名陶スラ

1

F 原幻

色用

布目

109万曆赤絵龍鳳凰唐草文蓋物9万曆赤絵龍鳳凰唐草文蓋物8万曆赤絵龍鳳凰唐草文蓋物

唐時代 第一集

10 南宋建窯油滴天目 10 南宋建窯油滴天目 8 景德鎮窯港白地黑花文藏 8 景德鎮窯港白地黑花文藏 8 景德鎮窯港上手碗 次注 10 南宋官窯青磁鉢 水注

10 9 法花紫地称花文瓶 8 万曆藍地赤絵牡丹文皿 7 嘉靖金襴手碗 二

込と同時に送金のこと、 金二〇〇〇円

週間にてお届け l, たし (31)

ま約

本で一番すぐれた左記曜科学幼燈映寫機御入用の方には日 精機会社製をおす (送料六〇〇円) すめします

スター、ルツクス型映寫機 ケース人) ファン冷却装置付

3 支瀬戸 中衛 本 公 3 支瀬戸 中衛 本 公 本 野 香 会 信 本 野 香 会 信 来 盌

二四、八〇〇円

8青織部馬人物絵鉢- 瀬戸黒茶盌

高台図

東京都

中央区銀座東二の十

振替口座東京八四四九九番 E 本 陶磁協会

明時代 嘉靖 新 新 赤 赤 · 赤絵草花文 赤絵草花文鉢 。 染付水草文盤 第一集

6 5 4 3 2 1 = = = = = =

二彩旗 二彩旗 三彩類頭手付瓶 三彩旗頭手付瓶

唐時代

無二集

銷萬聲

宋時代

第二集

清時代

第一集

美濃系

第一集

唐津 第一集

2 絵唐津筒茶盌藤ノ川內窯

10 9 雅正黑白磁和暴紅魚女馬上盃(高足紀) 9 雅正黑白磁和聚紅魚女儿 9 雅正黑白磁和聚紅瓶 9 雅正黑的磁桃花紅瓶 9 雅正黑的磁桃花紅瓶 9 雅正黑的磁桃花紅瓶 9 雅正黑的磁桃花紅瓶 9 雅正黑的磁桃花紅瓶 1 康熙白磁桃花紅木白尊 1 下水山文肌 第一集 (各十枚一組)

1 繩文土器 古代中世 日

朝鮮唐津一重口水指

斑唐津ぐい

祝 創

中宮宮森篠浜菅梅須遠室服磯渋大斎杉徳大蕪 村川川村原口原澤藤藤清部野井屋藤下澤場木.以 三 彦宗 風 桃 利治成宗葉 波登竹義千雄通太次吟次玄船 奈子馬行郎彥済郎郎甫郎三子清敦助夫信韻庵

瀨吉圓久小山大服今御松大三吾川京伊高田後 川田 米森內塚部井^手方倉井妻端極藤 老美 昌太 て新健一正信 三 高徳康友 三子増 世郎会る一二一次之脩郎亀大穂成助毅郎男平

西荻小田岡圓眞中渡金吉瀬竹伊飯廣廣繭 四二之之善 樹造夫治夫郎毅郎迪郎助助次志郎熙斎吉



ですが、もはや図錄を見て が満足していただけると存じます。 製社の都合でおくれており ただいていることと 申譯ないこと

は必ずお忘れなく往復ハガキの委任状を御出し下になりにくい方が多いことでしようが、その場合総会が毎年四月に開かれますが地方会員は御出席 **込み願い上ます。又支部会員の方は支部にありまげます。予約願つていない会員の方は支部にありまげます。予約願つていない会員の方々も至急御申した結果干二百円となりましたことをお詫び申上**

○三月号で永らく御世話になりました「日本美術工の三月号で永らく御世話になりました「日本美術工で、僅か一ヶ月の準備期間で曲りなりに会員へがありましたが、新雑誌発行という希望に張り切がありましたが、新雑誌発行という希望に張り切がありましたが、新雑誌発行という希望に張り切がありました。号を重ねるに從つおいますよう願い上げます 機関誌の面目を開拓して行きたいと思つて居りまックして編集を手傳つてもらつていますので協会洋隲磁研究所の有尾佐治氏が長い室白からカムバ

したいと念じています。三月陶報でお知らせしたす。二号三号は多分普通号で進み四号で特別号に

)地方支部よりの消息が少いが、追々多くなること及び啓蒙記事に円を入れたいと考えています。二号には米内山氏、小山理事の論文、その他隨筆 どしく〜お送り下さい。(佐蕨生)と思いますが、どし〜〜会の消息、又人事のこと

成化の陶磁の稿について

度い。本号の原色版の説明は來月号になることを御の図版文章無ね合せて一体のものとして御読み願いため原色版や図版と稿の緊密な連絡が欠け、読者に申譯ない不徹底な稿となることを避けるわけにいかなかつた。甚勝手ではあるが、私の稿に限り来月号なかつた。甚勝手ではあるが、私の稿に限り来月号の図版文章無ね合せて一体のものとして御読み願いという念願から、長篇を予備し、にという念願から、他に稿が集らなくても何とか出し、という念願から、他に稿が集らなくても何とか出し、という念願から、他に稿が集らなくても何とか出し、本号の原色版の説明は來月号になることを御という意味が表示。

○本月の初号は尾崎顧問、久志、保田、小森、満岡の理事の出陣で客員からもそれよくい、原稿をいれだいて感謝しております。尾崎顧問の「陶説」となって第三号位この解とがいて感謝しております。尾崎顧問の「陶説」

○横浜コレクション特別展

昭和二十八年四月 一日発行昭和二十八年三月三十一日印刷

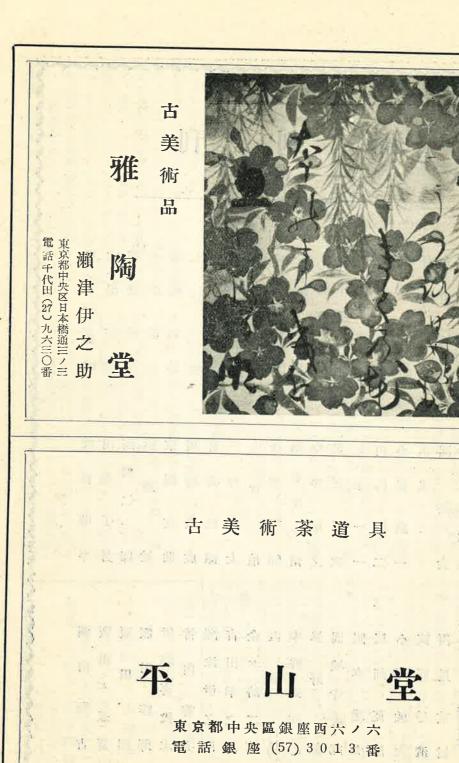
洋古陶磁特別展」を開催する、於国立博物館。(黑田)四月十日から五月末日まで故横河民禰翁寄贈の「東四月十日から五月末日まで故横河民禰翁寄贈の「東

振替東京 八四四九九 電話京橋(56)二〇五七電話京橋(50)二〇五七甲央区銀座東二の十一 京文社印刷所 卷 養 太 郎 ○無形文化財諸匠の特別展観 ○国立博物館陶磁器講座別く 作家は井上良齊氏他十数作家。(黒田) 為諸陶整作家に呼びかけこれが完納を期さる。依囑外務省の依囑にて外地大公使館を飾る陶磁器調達の

四月二十九日小山富士夫氏により閉鮮の陶器について、英国大使館フイケス氏は、『鬼洋陶磁の収集』について。三十日田中作太郎氏は『日本上代のやきもの他を。三十一日谷川徹三氏の茶碗のはなし、中川千咲氏は日本近世の陶藝を。

(32)

中 國古代美術 電話銀座(57)○一〇三番電話銀座(57)○一〇三番電話上③六二七八番電話上3六二七八番 京都市中京区寺町通御池下 樂しめる美術品を おするめする店 松 屋 (本館) 電話京橋(66)二六四一番 製 座 三 / 五 和



C公益社団法人日本陶磁協会

文珠会 該の記 學地 京橋 和田町 同 更話的の六五六 電話的 三六五 電話(83)五五0九 電話多0五三

画

廊

生

彌

電話銀座(57)三二二〇 並 木通獺生館ビル

西洋古美術

西欧古陶時代ガラス

月

古古

陶美

電話京橋(56)三七九二番 坂 本 五 郎 上

古

美

茶

電話岡山三四一八二

C公益社団法人日本陶磁協会



定評ある臨牀醫家の好伴侶

週刊・綜合醫學雑誌

日本醫事新報

B5 判 · 84 頁 定価一部 50 円 送料 4 円

東京都中央区銀座東2丁目11番地 日本醫事新報礼 TEL 京橋(56)3458 振替東京25171

清新發刺 內容充実

六十年の信用

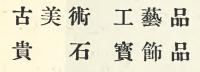
月掛の保險

傘 太陽生命



電話千代田(27)二八八〇

C公益社団法人日本陶磁協会

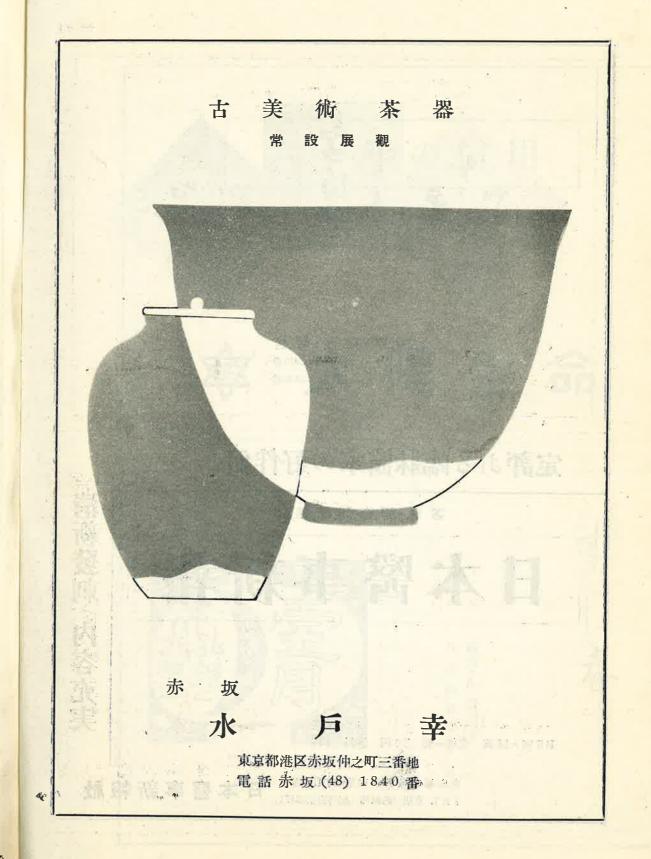








東京銀座一丁目電話(56)3033-5858





海外古美術展

朝 鮮・中 国・印 度 ペルシャ・ギリシャ・エジプト 五月 - 日より

浮世 絵 展

箱根美術館

强羅公園上 下車驛前

東京銀行



The TOSETSU A Monthly Journal Published by The JAPAN CERAMIC SOCIETY



古陶磁金石

繭山龍泉堂

電話京職 (56) 3058.6716

C公益社団法人日本陶磁協会